



宝前从史新闻

18
170



貸附會社

寄笑

新新聞

金貸大評議

第壹

号

力美家
等年



僕不初は如き

梅亭泥夫

穀米あり

母は舟の穴成楕り

有る六冊

榎木の板子彫る

穿らとて丸

きんぎょを

食するも

たぐのま



寄笑新聞第一号

金貨大評議

東京

○金貨大評議

橋爪錦造編集

昭和十三年
二月四日 購求

一新開町み搦ヒ社と書一札を出せ一家ありて内

あいの年のあろ三十七八より五十四五の男三銘評議

區々ある中み惣助と呼るもの座中み向ひ貸すと

り字ち代貝と書く貝の物を搦き奇せヒふみ宜

まよ以て浮立の金銀を搦ヒふの心より搦ヒ社と

号づけ此家を會社と做せしより初日と歩集へど

貸出の規則極ら私を持明ずと耳き吝藏と云ふ
の膝を進め然もむ貪次郎さんとも相談と云ふ
借方ちあらく枝猪めく昨日小生方へ中一込んで
まへつゝのかめいと書入れあて貸せとのと由名家
作なり宜いが家名へ虫入れ成らぬと断つた
さきの者の言ふあの家名でいひ西大ごとと中一と
耳の垂と班の大犬を連れて来と茶の瓶う水瓶あ
はどーとこの尻尾の生と西大あ憫れて仕舞ま
たと吐す側り貪次郎其處で小生の監えあは極

安利あて年一割の三十兩一分小貸附十三年の長年
賦取上とら人々喜んぶ借りませう尤前利申急十
兩貸せむ十三年の利十三圓と成ると以て此方ち
貸す金へ三四足させて直小納めさせねを身代限り
小出逢ひても三兩の徳あの方が大丈夫うと思ひ
まると耳て慾助點頭あぐいやす小生も其の仕法
小気付附き貸さうと思つゝ觸あてと今以て
人も借り小来あいの不思議さと云ふ吝藏か
かんぐえ世の中が不景氣どろろ其規則と食付

刀書

二

まにまの^て前利を^とるの御法度^とは^とよりり
利を五兩一分^として三日縛りと定め月^とは十度の
倍利^と一割の外^と一割の禮金を取ると為る是^とを
十三年賦^との割より悪いが其位^とは緩めずの借人が
難儀^との^とませう貪次郎^とは三日の倍利^との餘り
お安^とい手前^とごもの隣家の藤間^とで朝晩の踊り
で一日も休^とまぬとい^と言ふとと^と話^とせむ吝^と藏^と夫^とは
振り附^との藤間で^とお座^といませう貪次郎^とさ^とゆるさ
ふりつけと貸^とつけとい^とふ^と規則^とが違^とひま^とれり

慾助^とおふ借主^との一町内^とを^と残^とらず請人^とおさせ戸長町
用掛りの興印^とと^とふ^とと^とろ^と残^と此^と人^と達^との御用^と多^とだ
から其代り^とは産神^との神主^とと^と且^と那^と寺^との和尚^とと^とみ
柔印^とを致^とさせませうと^と耳^とき吝^と藏^と小^と首^と成^と頃^とけ何^とさ
ま神主^ととの宜^とい思^とひ附^とど^と和尚^とへ悪^とさ^とう^とる何^と
故^とあ^と神主^とを^と拂^とひ^とぬ人^と拂^とひ^とた^とぬ人と^と辨^とむ^とが和^と
尚^とハ生^と者^と必^と滅^と會^と者^と定^と離^となど悟^とり^とめ^とり^とと^と残^と
云^とふ^とあ^とち^とと不安^と心^とさ^と子^と慾助^と手^とを^と拍^とち^と宜^とい^と
ふ^と附^とき^と而^とて^と見^とると^と證^と人^とより^と書^と入^とれ^とが^と肝^と心^ととい^と言^と

カ

三

その株式を潰れがけり家作へ火事で焼るく
引当へ地面に限るとすき貪次郎まて頭を振り
否々近江の湖水や富士の山を一夜に出来とと云
ふ嗽し引當を取と地面が龍宮へ所替えあさり
胎内の息あつた穴あてもあらう物あら取つ返し
へ附ません河板監えても金を向うへ渡さずは利
を取る工夫でそければ面白く無いと云ふは吾等
溜息のき世の中の融通貪乏人助けのため所同
前ふ初心痛りとすへ國への奉公天朝への御恩報と

存ドまけけきど元金と御さあいで利の多きと工夫の
あつた時々當惑いたりますト相談とらぐなる折
かし孫子の障子紙内に入り来るもの同一社中
の算兵衛あつた各方の結へ次の間みて遂一承知の
たしとが小生の思ひ入きといふ大さふ遠ふ実不皆さん
のあ説の通り貸借を天下の融通貸す者へ借りと
者かす利をえらと今日の活業と為し借とをのら
借りと金元手あつて利を出してても割に當る根
本諸るう甲の間を欠ぬら何れも無て惚りぬら令

切号



高利を
 氷あり
 是を渡ると
 まをとり
 利足の是なり
 足を取らるるを倒る
 取るものいすなり
 者い倒るる
 圓

日十月七年一十治明



借^かりだ^らが^ら金^{かね}を^を貸^かふ^の元^{もと}金^{かね}や^り利^り足^{そく}の上^{うへ}り^に残^{のこ}苦^くみ^疾ま
 あ^らい^に借^かり^とを^の身^み代^{しろ}が^よ宜^よく^ある^やう^にお^もて^様
 お^た方^{かた}が^よ宜^よいと^おも^ひま^{した}所^{ところ}を^よ世^よの^ち中^{ちゆう}の^{きん}金^{かね}貸^か残^{のこ}る^る
 お^の書^{かき}入^いれ^る物^{もの}を^も勿^も論^{ろん}娘^{むすめ}を^う賣^うせ^やう^と身^み代^{しろ}限^{かぎ}り^おみ
 為^なせ^は根^ねと^もる^もの^さ人^{ひと}取^とを^も宜^よいと^おも^ひり^習元^{もと}
 より^お家^{いえ}業^{わざ}の^あり^ぬ根^ねを^のだ^ら
 お^の生^{せい}の^か監^{かん}げ^へる^左様^{さま}で^ある^の貸^かの^あ活^{かつ}業^{わざ}は^なり^やア
 借^かり^の人^{ひと}の^お得^{とく}意^いだ^う々^々何^{どこ}處^{ところ}ま^でも^大切^{せき}ふ^して^先方^{かた}の
 事^{こと}情^{じやう}を^あ篤^{あつ}と^き正^{ただ}し^見当^まが^附々^々滞^{とど}り^おみ^関係^{けん}

ら^ず貸^かと^う人^{ひと}も^亦貸^かし^物お^ぬつ^上で^取立^たと^い夫^{おと}ど
 ろ^いと^まう^一息^{いき}と^おも^いと^ころ^で押^お倒^{たお}す^事が^ある^其
 代^かり^お貸^かる^者と^貸る^{もの}の^さ差^さ別^{べつ}と^いふ^則ち
 是^これ^と懐^{なつ}中^{ちゆう}か^ら出^です^書附^{つけ}を^三人^{にん}の^請取^とり^用ら^いと
 見^みる^お

- 一 何^{なん}も^限ら^ず賭^か事^じと^好む^者お^もら^る 貸^かさ^ず
- 一 持^も女^{によ}が^らひ^唱妓^か賣^うす^人お^もら^る 貸^かさ^ず
- 一 祭^{まつり}禮^{れい}開^{ひら}帳^{ちやう}の^出迎^{むか}ひ^等お^も費^つす^金を 貸^かさ^ず
- 一 飲^のみ^止り^おも^く酒^{さけ}を^飲た^がる^人お^もら^る 貸^かさ^ず

一 家業を疎み遊山抱與て好む者あり 貸さず
 一 劇場寄縁日歩行して尻の居らぬものあり 貸さず
 一 朝寐宵ツ張み買食とあこがる者あり 貸さず
 斯の如き癖あるものふ金を貸せむを益ある 雑費の
 助けとぬり一度二度も約束通り返して由終ふ
 公裁を仰く等ふいたるに多かるべし 假令滞りを
 く返金為るとも道理小背くと以て除く
 一 君小忠實親小孝行あるを 貸す
 一 正直ありて今日を守るものあり 貸す

一 難小蒞る恐む義小背りざる者あり 貸す
 一 出精して怠らず稼ぐ者あり 貸す
 一 病煩ひ災難とうと受け明日の身の上も分ち
 がく者あり前條の行ひ有る請人と得て貸す
 但し是等の人のく憐むづれあり 貸人侍
 ず貸すの理あるども 諷りの元金残以て自
 己の活計を立を助け救ふ由あり 依て
 暫時是を忍ぶ
 前條の人々不運あり貧乏神之具負を受け

借銭の淵に沈むとありとも時来れを身立家せ
起すの浮瀬へ乗り出すと必定の理あるを貸附の
金銭の度を失ひ返すことを得ざるも催促せど
能く事情改正し貸したる上ふも猶足して貸すべ
し心長くし彼命を人取をとり外り有るべし
らば我が金をそつそ彼が力に助け身を立て家を
起させあるを夫あむ玉への勤め天朝への御恩報
トなきと云ふも可あしん我が輩の如き金貸しと
在る高利貸と卑む高利の則氷あり解安く推け

安く滑濶安し以て其活業の危うれを知るべし
亦金を貸して得るところの物を利足し云ひ畧し
て足と呼ぶ足をとり強く引を倒れざる若かり
爰を以て高利貸借りる人々の皆倒れ潰るなり
金貸貸し高利ふ因りて世と渡るも我濶らぎ足
と云ふ所所得と為るも人取例さば我破を助け彼
のたれも我助りてらそ真の金貸世間の融通と
いふふべし書入れふるの家藏地面不在らざ
借主の心不在り請人の産神の神職且那寺の

四号

和尚を恃まば借り主の腕と脚との稼み任せん
 と云ふ然れど借り主の方み如何ある議論有る
 此旨の次篇を待ちおの説を問ひ一上當社の規則
 我極んと言を皆算兵衛が理解ふ服一借人の説
 論を待とりけり

寄笑新聞第一号 終

東京本石町四丁目

岩本 忠 藏

同京橋彌左工門町

大島屋傳右工門

横濱弁天通四丁目

中屋 銀次郎

上州高寄田町三丁目

柴田 源 作

信州上田原町三丁目

田中長右工門

同長野吉田村

長田 忠之助

武州熊谷本町三丁目

和田 貞 節

東京照降町

惠比壽屋庄七

本局

寄 笑 社

大 新 聞

第二号

金借

橋爪

錦造編

集

手前目筭



馬麻小 附の

まづける 糸

芳平

五錢



身代桐

身代桐を西洋より

渡りしものありては葉うち枯せ
 幹をざらとあり枝の先を振り拳とする
 然る日分鳥まどまのあきり拳を食く鳴く
 百葉の形平の木の蓋は編笠のつゝ蓋も
 有る後日の用意あり

寄笑新聞第二号

金借手前目集

東京

橋爪錦造編集

爰は何れの新道あらんりきり栗の木の上臺は無多
 銭を遣ひ杉の柱を建て果報の寐て松の敷居鴨居へ
 當り雑巾の跡を前代の光りみて捕まへ所あり始計
 小肩袋入れり亭主の吞助同乳求むる食心坊奴懶七
 さと小さる火鉢とあり圍を相替らば金錢を借
 り出す評議喧ましく食心坊言ふ此先の新寢町屋

一貸附所が出来たりと走りて去るところを借り出
し人と思ふが何ぞ趣向の有る人々と軍さ吞助
舌嘗拗りと為し僕も其事で気の揉る最中其の
手續さひ奴懶七君無限の奴懶七然れをり僕已
小西犬を書入るもいへてきゆんとおひ及むぬ少し借
たり尻尾の何程長くも宜いと言ひ込んとて言ん生
りる引當どと喰付り移り斗りお怒らまこと吞助
額を扱て持ちやア開け移り奴等と併し何振じて
借り出す工夫が有りさうなるの貸すところが出来

て借り事が出来るけりやア借の浮世も生れて出
詮が移り食心坊僕が見も亦同一借と云ふ字の扁
と作りと強分て書と昔の人とあるを以て昔の
人も借を拵へる事が好ぶ違へ移り移りの證據あり
古今集の中ふ「春がすそめをみて性しかり今
ぞ唱ふる秋霧のうらみ有りてまの歌のんち
春霞の引ころ借りて金を秋霧の立時分返すの
で返すのが実お怨うつてかゝる今ぞ鳴ると詠ど
とのと此外かり金の歌の奉々笑へがさけまど

くい返すが惜しいと云ふらら亦發句でも七部
の口小「麦食とかりと」らんど別れらる。是は變飯
を食ふ往々借りと金どが食う仕舞とら返す
が惜しくあらうて来とら返す金も向つと別れら
ると哀んど辞加賀の千代の夕ふも「初りや並
づく」の惜しいと。是も千代が初めて借りと持ら
替の借を返すとら金並べの竝べとが初らべと
返すの惜しい物だと「あゝ心り」此名吟を吐とと
のとどが女の心で「惜しいと言ふのも」を「理」の「福」

候一昔の入さ人借と金を返すの皆此通り借りがる
のどまの「今の入さ人貸と金を返せ」との無法な話
だと言ふ口押へ吞助が壁ふ耳有り借出さうとの
始計最中若一替の辞々貸人の耳へ這入とら何れ
する奴懶七声と密め実み端借とい密あるを以と
善とす僕も施す可き一計あり先聘が厚うとら
搔と社へ言ひ込と彼が貸附の規則も従ひ利足ら
入とらと厭とら禮金の多き奴厭とら借込と八百
入とらと金を此方へ請取とら最後の助元金を勿

論利足日拂えず棄置るを彼必ず公裁と爲す
其の時僕裁判所へ出づ言ふ小生末ど娑婆
へ生れ出ず地獄の八町目あり一時彼等小金と
貸したる小返さるしめを極樂の東門へ出訴し
および阿彌陀如来の裁判を請ふ娑婆へ生
れ出づ返すと小極り如来の後の世の証拠と
做せとて慾助を獅子鼻吝藏を煎齒ふしと
娑婆へ出づあは則只今の元告人代書人で少社
います慾助を獅子鼻小做せし四四の十六田吝

藏の煎齒ふ為しはわつを六十四田借りつりと言
ふ證據あり殊小生の印形の家鴨小卵と抱せし
所あり返さぬと小印し前世小貸したると差引
勘定し永年の利分ら負くも積り委細ら
阿彌陀如来小由問合せ下され度しと言ひて裁
判官を鐘の有る寺へ伴ひ往き如来の口を利うざ
まども鐘小声やなさせ答ふる故由尋ねの上鐘
を打つ何時貸すと云ふと彼由告有るありと言ひ
て裁判官小如来へ事情を問はせし後鐘と撞く

阿彌陀如来
 借有る者
 獅子鼻を歯と為す
 娑婆へ生くる
 時の證拠と做す



鐘々声を発し「ホーンと唸るその時某傍らより
ふゆの通り盆ふ貸さふ相違いはいはせんと言
た〜會社の奴等いづらの旨も出せぬ人ともあが
何様ぞ食心坊へん盆でも移へお茶番どア夫より
今十四貸て下さるま〜十萬圓ありて返納致し
期月へ来月でも再来月でもお都合お任せすと言
て借るのぞ其處で期月ふ至り催促ふ来たら畏
まりゆ〜た直ふ返金致す然〜まぐ〜莫大の大
金ゆゑ此世での出来ず十萬圓とヤ〜〜ハ十萬億

土ふての積り高あきをを苦勞まぐ〜地獄までお
出下さるべ〜尤道中入用の手前方あ〜賄う之
門出の首縊り不致しませ〜身投げ不致し
せうら花やろ不致せを割服でぬぐいますと言
た〜貸人の方肝を潰して逃支度不ぬるを
附込と違約金取ると、近頃の新聞發明どらう
何根ど〜奴懶七と舌赤〜維ガ地獄で返す
約束の金を貸す奴ダ有るをの〜食心坊條約を
仕移人ぢやア遠約金へ取れぬ人ら吞助無多評言

ありの实地の咄しや眼目ど僕が監げえふやア濃
とまど仕組でな人と乗込むめんとあふ其處
彼招持うけるのど此度西で新発明の金の生る
木の種と馬麻不附る菜と智恵の袋との三品を
英吉利と佛蘭西と亞米利加と人八百馬力の蒸
氣船一艘づへ積込む程注文してをつとろ二
艘を難船をしても一艘無事に着船をを御
開港已来の大金儲けゆ名金の生る木馬麻不附
ける藥智恵の袋の着岸為るまぐ六百田を

りお借中たの利足いお望次才尤連印ハ三銘など
大丈夫不見せうけてもお同前不家の店借諸道具
一人の物金を請取るが最後此方う身代限りを願
ひ一刻も早く事済みして三人が六百田を懐中ふ入
神邊長崎新瀉函館の五港廻りの妙策だらうと追
々噂り不油が乗り大声立ちを差配人善吉軍つけ
案内もこれ入り来り借にお前さん方の甘い相談
小生半口と去ひて人づ能監えと後トろ金錢と
云小者の生優しの苦しとぢやア出来物人蘇末る家

小居て食ふ物も食はず衣物も着ず義理を欠き交際
 を欠き朝起を一夜深し元日つう大晦日まぐ稼
 いても間が悪く残り残る銭もろくせん雑どろく寄
 兼る家小住と美味物を食ひ美衣服を着面白思
 ひとあといの當然所残夫でいあ〜ぬと辛抱の齒を
 食ををつくの文父を一文残し足手の草卧と励
 て天保を一救溜り耳残押へ眼を眠り口の吐酸を
 飲込んで一朱拵へ曳漸と貯と金を紙一枚小替て
 貸すのど物を迂闊な祝ちやア物人米でさ人粒々皆

辛苦の語あり増してや金銭人の絞つて油汗を栄曜
 の為小借倒さうとい以の外の不所存あり天下の
 融通據ろそく借をたまア被根言ふ時ど
 一 商賣の元手或は地面家作等を買ふ足一金
 一 親兄弟の不幸火事災難出逢ひする時
 一 已も勿論家族の中病と煩ひありて稼を做まそ
 能いざる折
 然もいも凌る丈に凌ぎて借めが美し借財の鎖ふ繫
 がま懲役の奴とあるを雑願ん往昔の賢者も

借財かりがひして返かへさぬ中うちの大おほいある石臼いしうす我首わがくびふ掛かく居ゐる
 振ふるると言いれたなり若借わかしかりた〜の難なんを凌しのぎ〜恩澤おんたくを思おもふ
 ひ我われも亦また衣食住いしょくぢうの三ツさんを欠くさ一刻いっくわくも早はやく返かへすべ〜
 返かへ〜さ人為ひとまを差支さしつかえなく亦貸またか〜人の金銭かねせんと雖いえも
 我われが懐中ふとろ中うちふ有あると整ひと〜か〜ん然しかるを始はじめより借倒かりたさ
 んるど〜の始計はじけい不藪ふさく〜呵いり付つら〜三人さんにんの顔かほを〜合あひ
 して眼斗めまりむ〜く〜居ゐ〜り

寄笑新聞第二号 終

東京本石町四丁目 岩本 忠 藏
 同京橋彌左工門町 大島屋傳右工門
 横濱弁天通四丁目 中屋 銀次郎

上州高寄田町三丁目 柴田 源 作
 信州上田原町三丁目 田中長右工門
 同長野吉田村 長田 忠 之 助
 武州熊谷本町三丁目 和 田 貞 節
 東京照降町 惠比壽屋庄 七
 本局 寄 笑 社

寄新笑
耳

貸借
問答

第三号

権川鏡造編集

金かり

金かり



寄新笑
耳

斯の如き規則ありて貸より鬻斗を添てきるが増一を
ど誹りけきとも搔と社の者等の確乎とて撓むと
をく密り不借人の実情を正し一ヶ月が来りても全
く返す宵豫無れを貸有る上亦貸し親が子を
育て師匠が弟子致扱ふ様にして借人の身代を守
り立る然專一と為しかを元来忠孝の徳を備へし
借人稼ぎふ怠らぬ上貸附所の世話厚きふ感し晝
夜職ふ附き勉強の力大いあるを以て終ふ悪事災難
病難火難の貧乏神を投り出さし豊の身代と成るも

貸附所の恩澤として借たる金を返す時ふハ一割の禮
金ふ五兩一分の利子ハ未定まり故言を待ず別ふ数
多の禮金と添へ持来るふ因り格外の大利を得る
搔と社の繁昌他の貸附所の者の肝と取り鬻り是
み於て江湖上の金貸ら初めて書入れハ家藏ふ在ら
ず借人の生質の善悪ふ在ると發明し皆搔と社の
規則ふ基づき習ひしり
然も此時ふ當り廣大ある家藏地面と持たりと
り平常の行ひ惡しけきを半欠の金錢をどふ貸す

者之きや融通ひくと止る況や謀計を廻らし偽り
と構えなごして會社の金銭を引出さんとと工計む
者に於くかや總一文の工面も出来ず亦着と切り雀と
悪口さうもな宿の何處と名乗るも耻うしき世帯持ふ
ても行ひ正しく稼ぎふ怠らぬ者の金融自在みく
差支えなきと扱裏と往來をりふ齊一爰ふ於く
金銭の融通と宜くし身代と富さんと思つ忠行の
道と守り行ひと正し稼ぎと勉強をりみ有り身持
宜けきを何れの會社へ往ても金と借るふ差支えを

くして我懐中み有るも同前あるを發明し一人まが善み
歸して金銭の融通を能く為を向ふ三軒兩隣の
このらも同トく善み歸し金の融通を善く為るふ
因り其近隣まご是ふ習ひ忽地一町内み及び小區に
渡り大區み蔓延し終み全市中一般の風俗と成り
しるを金銀貸借の訴訟を勿論何事み因らず公
裁を請る者絶くなく裁判官の只主人み忠義親み
孝行の人夥しく殖し茲以て是ふまの褒美の禍へみ
の世給しかりしに全く筭兵衛がのひ附の大當りに

て人氣一變する時節不懐ひ一物あらん然も一日
換と社の連中集會して當社の貸附案外の大益
と成り儲け日々増加す由巨万の金銀置所
き迫小至るの全く借人の律義ある恩澤小依るあり
茲を以て今より高利貸を廢し無利足貸と變社
致すの如何ふとの評議発せしが實不悪不強きの善
みの強しとの諺へ空しくず始め大慾張の入々
故を慾張と成るも強く吝藏進とくふ方今既
小開化の御代と成り困究の者更ふをを無利

足ふく只金を遣へせんとの押強き論ならん迫てきつ
て呉る人へ一割の禮金を出し五兩ふ付き一分づ手数料
を添へずの借る者そく會社忽地潰るべし慾助點頭如
何さぬ金をその時め慾いとふか澤山小殖ると厄
介る物おの厄介と人小貸付く足もを一割の禮金
小五兩一分位の手数料をせらるる至當あらん貧次
糸規則をりり極ても高利を廢しての借人が来り人
と思ふ箕兵衛小首を傾げ然れを此終での貸附の
法逆も行われぬ故其以前貸したるくを呼び奇せ

貸人かいての
 利り足たりて
 貸人かいてと言いひ
 借人かいてを
 高利たかありと
 借人かいてと言いひ
 果たまに大おほ議論ぎろんとまり



義理詰めて金を持せざるより外に一言ふ一同
手と拍ち仕法ゆつとも妙ありとく貸附金の事は附き
所意得度と有まむ苦勞なぐ未車と願ふと書
書状を是迄の貸得意へ十万本餘り郵便依り
出たり然まむ其手紙即刻前ふ借りたる者の方
へ届き一紙以て吞助食心坊奴懶七善吉ら歩奇り評議
區々ある中に吞助言ふ若し金を貸んとまむ前ふ借
と思も有まむ丸で断る譯ふも往まのうら成丈高利
ありて五割の禮金ふ一円で二分位の利ふ押付く来

ると仕やう食心坊言ふ去年あつり迄の金を借るゝ利が
安いと安利がくつうつういまんと襤を述べ利が高い
と借と後が高利と考へ杯と言と物どが今で飛
切りの高利あつり借ても宜し一円ふ百文後る日分
の實ふ恐まる此間除所で一円ふ付一日に三分の利
ら金持へ施しの為ふ貸とまむ口が有つと二三万
圓借招とまむ内人ふ借らして仕舞く残念至極か往
昔寛永年間ふ豊作が續き米が出来過とので田沼
と云ふ人が海へ棄させたとの咄一當節の摸振で

程をく金とも海へ捨る振ふ成るごらう奴懶七。へん
 たらう所既ふ昨日の新耳ふ往来へ金と棄との
 我巡査ふ見付らる三百山の罰金と持せらるご
 帰さるごとさるご善吉の顔を擧め小生が差配の
 地面内へ捨金でも為さたご大い難儀何卒皆さ
 んが金を附くお異んるせん吞助金ヶ敵とる今の
 丑の事と言ごのごらう食心坊何ふ去ても議論ふ
 負さるご移人振ふをらかさるご各連立ち出往て撥
 ヒ社の者ふ面會為せしふ手数料と禮金を添る

由名金を借り呉よとの頼とある我此方の格別の高
 利あうを借んとこの請ふご議論追々募り吞助少
 一声と奮げ前方用達て戴さるる恩もあるご
 高大の利分とゆえり下さるあう借借んと申す
 五兩一分の手数料と出りたる上一割の禮金を逆
 捻ぢお押付給もんとの公平の議論在らざると
 難ごもを算え清も勃としてテモ耳記をき旁々
 うる金を貸すめ倒れを見込むと西洋各國と
 雖も皆同一然るを各方向一文の錢も例さるご

の約定をきき 禮金などを持来らまし我輩家の
 業も熟ざましと以て迂濶み受納致せし放今日
 の難儀とみ成りたり見ゆ如く藏坐敷長持筆
 笥のちゆもささゆ服櫃重箱踏臺の中まで金
 らざるのそし君等そを何とて看る金銀の天下の
 融通積蓄へし秘し藏すべき物あはれ然る
 と有し任せて仕舞込を置るを天理み背き世界
 の罪人と為るを如何みせん茲を以て各方み助け
 とてふありとばき善吉膝を進め如何み金銀

の天下の融通既し輪り持とゆも譬へも有れを水
 の流る如く動いと滞らざるぞ宜るあり然るを
 今日み至りて我輩方へも金銀多く溜り漸く
 天理み背ゆんと欲す故に君等を救ふ自由なり
 仰せの如くの貸附みては裁判所の御沙汰を請る
 由御免しを願ふの外をとしていつる請引気色
 をまを箕兵衛頼りみ歎息し施さんと為るふ世
 間も富たを世貫ひ人をく貸んとゆ人も借人
 を一鳴乎如何みせん私語を善吉も亦大息つ

まき四百四病の疾やまひより富とみんど怨襟物うらひもののををるア
 編者へんしや曰く此人こゝろ々々斯金銀きんぎんの多おほきふ當惑あつうく困弊えんぱいを
 ると雖なほも色いろふ溺おぼれ酒さけふ沈おちり居呀まよ衣服いふくの奢あこりふ
 心を附つがるの奚なんぞ賢えんり愚ぐり開化くわいり野蠻やばんり僕末ぼくまど
 是これを便べんずると能あたはず外眼あつめ八目やちめの教おしえを請こて後日あとひ
 再またび此落着このちやくちやくを記しるさんのをと

寄笑新聞第三号 終

東京本石町四丁目 岩本 忠 藏
 同京橋彌左工門町 大島屋傳右工門
 横濱天通四丁目 中屋 銀次郎

上州高寄田町三丁目 柴田 源 作
 信州上田原町三丁目 田中長右工門
 同長野吉田村 長田 忠 之 助
 武州熊谷本町三丁目 和田 貞 節
 東京照降町 惠比壽屋庄 七
 本局 寄 笑 社

新写

第四号

孔子郎

釋迦藏

耶蘇八の

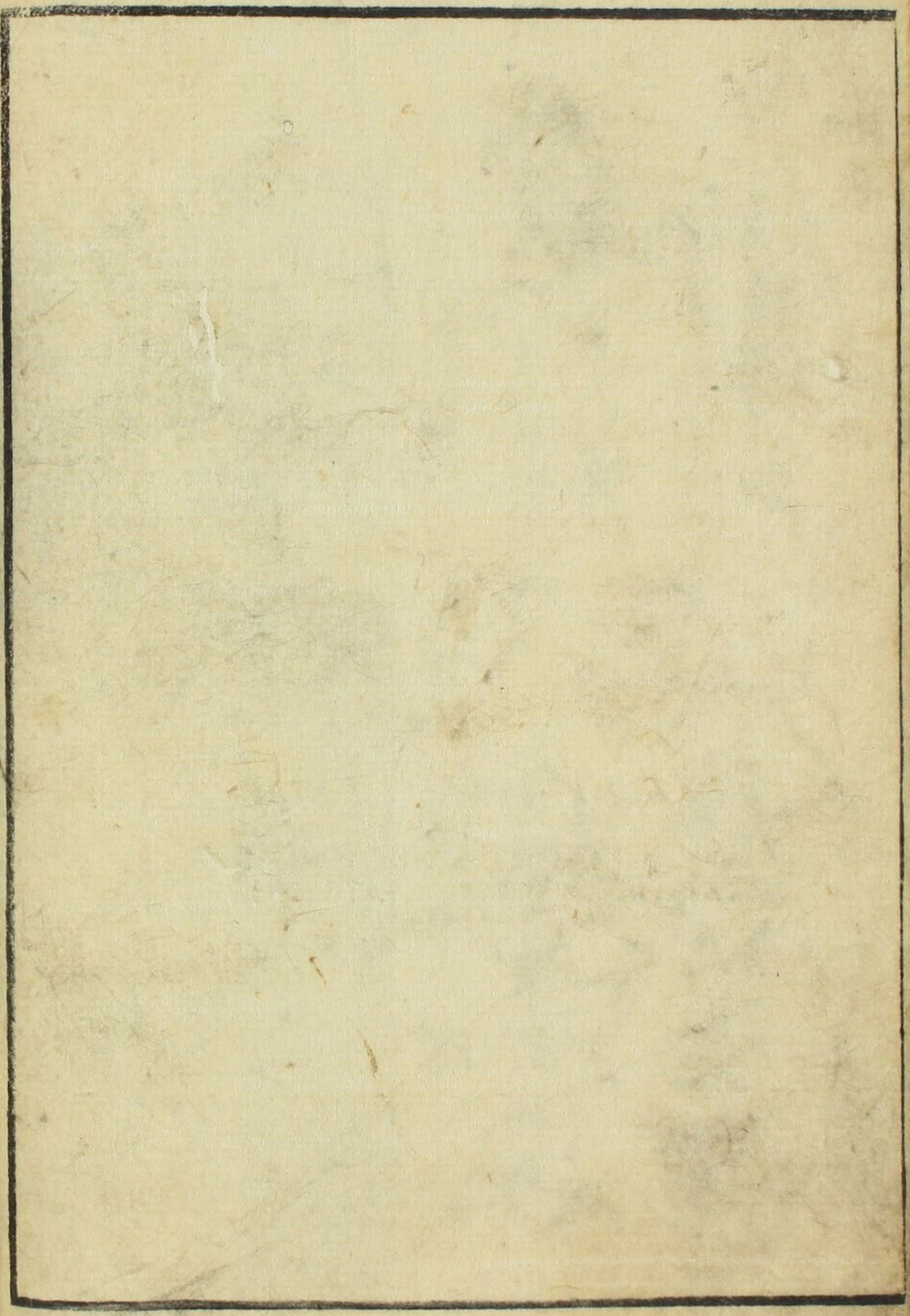
閉口

稿爪錦造 編集

價三錢五厘



孔子郎



一 高德の僧心の移る寫眞鏡を
 發明るさんと云ひ地獄より
 常張の鏡を借りよせ吾を
 てらん
 手幸みすると云ひ
 寄笑社中のもの
 うち早くかけつけ
 鏡みよのまのん
 ころふ下の鏡の中の十二支
 字彰々と頭をたれ大りよ赤面
 めいあまをばを徒を徒して後の慾心の戒めとあらん



○地獄より借りよせ
 常張の鏡

寄笑新聞第四号

東京

孔子郎叙迎藏
 耶蘇ハの閉口

橋爪錦造編集

梓弓もろ立かへる朝として萬代の竹千歳の松尻目
 繩と掛もくも賢き御世の賑ひを實に並びる目
 本屋の檐端み建一日の旗の東よく風ふ飄るの今日
 一由元始祭の祝ひ日ありとぞ知らまける折くよの
 門口を鞠窮如として入り来るの魯廼孔子郎と言
 ふ者ふて戶外より声うけ案内を乞ひ家の大禁と事

毎ふ問ひ主人申示兵衛ふ對一^て手と揖一^禮を厚^うう
言ふ徳孤あらず隣りのみより桴^いふ乗り海^うみ
浮^うび遠^あ方と厭^いえず尋^かね来^きたりあり君^きみ於^あて樂^あし
きうと日本屋申示兵衛も拍手と歩^あち是^これを迎^{むか}へ
答^{こた}ふるやう定め一^我が君子國の風を慕^あひ問^とわれ
なるべ一^長鳴鶏の鍋焼ふ神酒一^献まのうせん然^さ
れど目^め未^り諸^{しよ}の不^ふ浄^{じよ}を見^みせず耳^み未^り諸^{しよ}の不^ふ浄^{じよ}を
せど口^{くち}未^り諸^{しよ}の不^ふ浄^{じよ}とある者^{もの}の馳^ち走^{そう}致^きさずと孔子
郎喜^{らうき}びて亦^{また}言^いふ食^くの精^{しよ}を厭^いはず膾^えの細^こを厭^いず

肉^{にく}の敗^{やぶ}きたる食^くはず時^{とき}あらずを食^くはず割^きり正^{ただ}し
を喰^くはず薑^{しょう}の撒^まず用^{もち}由^{よし}附^つ合^あせあ^らば必^{かな}らず冀^き望^{ぼう}ふ又^{また}
酒^{さけ}の量^りあり乱^{らん}ふ及^{およ}ぶ程^{ほど}ふ飲^のむと大^{おほ}き合^あ口^{くち}と
あり話^わし膏^{あぶら}が乗^のる所^{ところ}へ抹^ま香^{かう}と五^ご種^{しゆ}香^{かう}の匂^{にお}ひ袋^{ふくろ}
を薰^{くも}らせ来^ら光^{こう}有^あるを維^いぞと見^みるふ天^{てん}竺^{ぢく}屋^やの釋^{しやく}迦^か藏^{ざう}
めく主人^{しゆじん}の申^ま示^し兵^{へい}衛^ゑと孔^{こう}子^し郎^{らう}ふ向^{むか}ひ合^あ掌^{てう}為^なし
て立^たたり孔^{こう}子^し郎^{らう}を豫^よて彼^かを妄^ま説^{せつ}ふきありと嫌^{きら}ひ
居^ゐる故^{ゆゑ}敬^{けい}して遠^{とほ}ざけん^と為^なれど主^{しゆ}人^{じん}の申^ま示^し兵^{へい}
衛^ゑの八^は百^{ひやく}や万^{まん}屋^やの妻^{つま}さん達^{たち}ふ訛^し宜^いして是^これを歡^{あそ}

待させんと做しけしを釋迦藏耳と不の環を左右
 へ振り過去の因縁ありを此處へ来りし是些
 の供物と茶とを為し給りしを功徳とせん
 を量の饗應を請るも精進なれを詮し殊ふ是へ
 参る道ふく大檀那の善者ふ出會ひ布施物を請
 るのそあらず非時の齋ふ人附とを扱ひ張とや
 控りありと述るを耳き孔子郎の苦き顔なり
 我の怪力乱神をさ人語らば况んや下晒落ふ於て
 不やふど私語兎角議論のりごとと釋迦藏の甘言

奇語八百の大着者ゆゑ孔子郎の律義一徹るふ取
 合ず日本屋の主人に向ひ君と我との元来親類本地
 垂跡るる諂諛と頼りふ護摩と摺りたり主人を
 孔子郎や釋迦藏をお前おきひか三や子僧の命令
 不用と教育させんとこの心ある故釋迦藏をも止免
 たりと孔子郎と席と分け坐敷を違へて坐し
 然るも二百年ほど前のもの當見世へ来りて子僧や
 下婢を誑らし大強ぎ強きせしはお拂ひ箱
 とり再び寄付ざり十字の耶蘇八と云ふ空

然引の酋長歐羅巴より来り開化の度切紛れより
 竊り入り込と見世の片隅臺所の上り端などふ
 て又ぞろ子僧や下婢を我が仲間より引入んとポカン
 ポカンの玻璃徳利干心太と固めと羊羹などを賄
 賂とあり甘口ある説を持ちかけて居るを耳つけ釋
 迦藏弥氣とぬり主人の勿論孔子郎をも談合ひ
 疾く是を追拂ちんと詈り交を此程耶蘇八
 より物を貰ひたる子僧とち事の由を耶蘇八
 告げらふ耶蘇八少一味方を得る気が強くぬり

釋迦藏孔四郎の勿論主人の申示兵衛をも自己が胡麻
 吹仲間ふ為さんとあり終ふ釋迦藏と議論を起し
 孔子郎も夫ふ加たるを以て主人の申示兵衛の棄置が
 たく同く我の場ふ立合ひたり時ふ釈迦藏天窓の疣
 く我角芽立しと言ふ汝の前ふ織田信長公ふ連れ
 其後まゝ太閤秀吉公ふ放逐さきたりしを猶竊り
 ふ忍び居て終ふ島原の廓ふ若者らと唆るり果
 の始末屋へ下げさせたる咎最大いあるふ依り再
 び此家へ寄せ付ざりしと私ふ踏込と来り又ぞろ若



天帝六日みて
 世界及び万物を
 拵らへ降りに急ぎ
 たまは象へ附べき陰囊と
 取りちがて狸よけ
 野猪は附べき耳と
 免ふ附らる
 うさぎ

日号



う
 た
 の
 む
 の
 む

日号

日号

七

者を誑うさんとす。以ての外、所為あり。我今汝と
年越の夜の死拂ひ、搦握ませ。西の海へさうりと
せり。べーと敷園、バ耶蘇、八眼と凹ませ。鼻と尖ら
せて答ふ。汝が黨として、始り此家へ来りし時、人し多
く不服あり。故守屋の紀方の争乱起りし、あらず
や。守屋汝等と否と、以て今に至り守屋
と悪くと為す。我を否まらば、後世汝等も亦悪
と言はん。寛永年中、若者を咬り、天草島原、以て
始末屋へ下げとる。偽者の為せ、業何ぞ我等が

七
八
九
十

黨あらんや。夫我が親方、天帝の子なり。天帝とい、天小
住と世界及び万物と持へたる神と云ふ。始り明り次
小空、次小雲、次小海、次小陸と持らん。夫より植物、小
移り、一、小水、二、小野、菜、三、小穀、類、四、小草、五、小花と持
へ。亦日月星と持へ、世界と照させて、後動物と出
け。一、小魚、二、小鳥、三、小昆虫、四、小獸、五、小人を持へ。グ
人の土と煉り、五体と為し、息を吹き込め、魂魄と
為す。其製、一方宛然、飴細工の吹物の如し。爰、以
て人死す、息を形体へ土へ戻し、魂魄を天へ引取

四号

四号

五

と暗喋う我親迦藏亦消し虚氣たる事と言ふをの
うらみ汝が親分を今より千八百七十七年あとい日本崇
神天皇の御世の六十五年ふ當りて生れ我が親分の
今より二千八百十七年前日本地神第五鸕鷀草薙不
合尊の御立ふ生れしめて汝が親分より娑婆へ出る
と千十年早し然して汝が親分へ亞細亞の西隅猶
太國今去ふ小亞細亞の地の拿撒連の町の大工の
子たり思ふ小我が佛法の教え天竺より亞利比亞
國へ移り亞刺比亞より猶太へ及ぶせしめて汝が親分

狡猾最甚しけきを我が教えの鼻をえりて耳替
へ天窓を削つて踵へ添るどし一派の教誨誅き天
帝の子ありと云ふ是実ふ狂人の寢言西犬の吠る
ふ整しかりし柳我が親方へ生れあぐりあて十
方世界を照し地より金の蓮華湧き出さ自然雙足
と捧ぐ時小親方手と分ち天地を指し獅子の吼る
声を發し天上天下唯我獨尊の語を為り然きを
天帝とい我が親方の事矣ぞ他ふ天帝有んと威
張りけきを孔子希堪えりし傍らより口と出し釋

迦藏耶蘇八等が説處の實は化物の話の如く茲を以て異端と攻るの害而已と我が先生ハ説きしり國政治め人と教ゆる所の忠信孝弟の他何を求めん仁義と並て言ふべき辞あり天へ昇るの地獄へ落るのし車井戸の釣瓶の振る給う致くば寄へ出て天狗連の前座ふ成るべしと嘲笑ふと嘆き釈迦藏と耶蘇ハる孔子弁ふ物言ひ出んと為し中へ申示兵衛躑と推入り各心と落着て僕が言ふ奴を耳かか夫我が神道の教えの徳を空氣と齊し空氣香も

そく色もそが如くなまど空氣無もば万物一と生と保つと能はず孰れ澤を蒙らざるべき日本の教えハ強ふ説とて用ひず論す事と為されども其の化四境ふ溢れ其澤異邦ふ及ぶ大徳を皆斯の如く豈弁と以て懐け法ふ憑りて教えを施す物と同日ありんや為ふ各不同ふ儒教釋教耶蘇教と奉る國ふ我が神州の如く開闢より以來帝統連綿として一百三十四代の今ふ及び歴世二千五百三十五年间外國他邦の為ふ毫も侵さざる確乎とて獨立なせ

る國^{こく}の^ちや^は是^{これ}他^たあ^らず^ん神^{しん}教^{きやう}の^{とく}徳^{とく}廣^{くわう}大^{たい}多^たを^を別^{べつ}不^ふ説^{せつ}
 論^{ろん}と^と設^{せつ}け^ぎざ^れれ^{ども}全^{ぜん}必^{ひつ}の^ん人^{にん}々^々自^じ然^{ぜん}の^{みち}道^{みち}不^ふ入^いり^其
 澤^{たく}を^を蒙^{もう}る^が故^{ゆゑ}あり^答へ^有ら^るを^を耳^{みみ}ん^如何^{いかん}ふ^如何^{いかん}ふ
 と^と捻^ねつ^けら^るる^孔子^{こう}郎^{らう}と^と始^{はじめ}り^とと^と釋^{しゃく}迦^か藏^{ざう}耶^や蘇^そ八^{はち}
 天^{てん}窓^まを^を搔^かき^更ふ^言句^ごも^も出^いで^ざり^けり
 元^{げん}天^{てん}カ

二日
 日
 藏

寄笑新聞第四号終

東京本石町四丁目 岩本 忠藏
 同京橋彌左工門町 大島屋傳右工門
 横濱弁天通四丁目 中屋 銀次郎



上州高寄田町三丁目 柴田 源作
 信州上田原町三丁目 田中長右工門
 同長野吉田村 長田 忠之助
 武州熊谷本町三丁目 和田 貞節
 東京照降町 惠比壽屋庄七
 本局 寄笑社

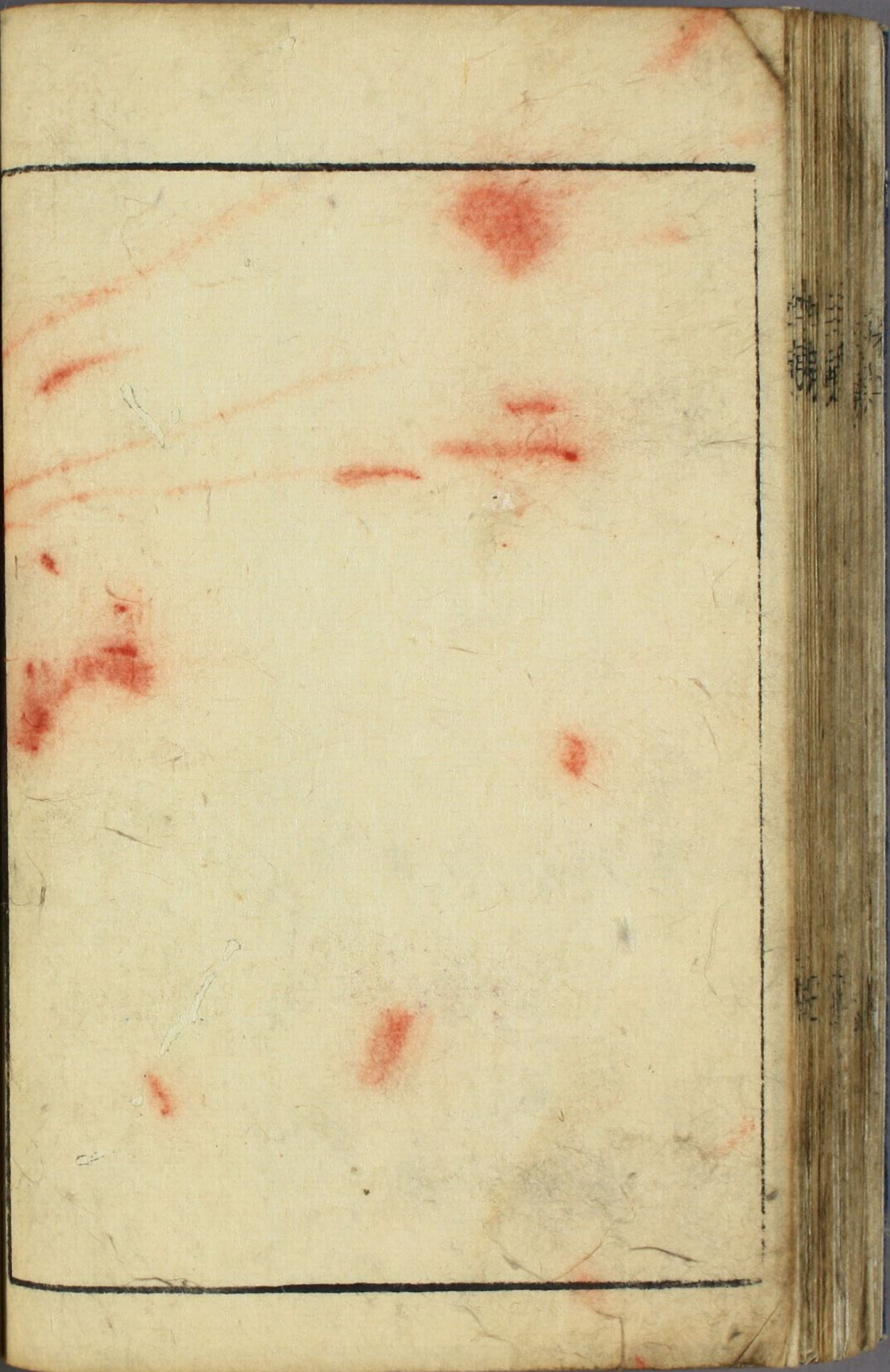
新軍

放社

第五号

橋爪錦造

編集



俗名あり譯多きと我庇のやうだと

言の然きども何をせらるる庇のやうだと

言のを知りぬの稀ありぬふ

声あり香ありの形俤あけまを

空々として取り止らざらぬと

はにわる寫生先生に庇の形俤を鏡よ

取んと我法し鼻をつまんてみせよと

押してねたまは書を捻り画きく看せよと

うん解を得たり板に書きしを客人に示す

心大

人の社



人の庇

寄笑新聞第五号

故庇辨

東京

橋爪錦造編集



茲小庇野高鳴と呼ぶ一書生あり一日同熟ある透

邊薫ふ對ひ大息して言ふ西洋各國の人の物の勝

色く他ふ及ぶべき無きと世界第一と稱す然る小

僕が如きは文に疎く武に拙く時勢は暗く家居舟

車の造築諸器械の細工礦山道路の學術不至る

うぐ一とて得し支を是生質の愚鈍あるよ

り起る所ありて今更如何とも為術多し獨り慙愧不堪
 えざるものく猶勉強の力と云へし世第一と云へ
 う程の事と云へし得んと云へし然る所維新以
 来東京帝城の中不於て午十二時毎不 大砲と一発
 す其音き天不震ひ地不寒き近く耳と噴を雷の
 頭上不霹靂如く遠く是と耳を北不春嶺の雪下
 一の如く以て四方六七里不達す豈潔くかくざらん
 乎此故不僕常不十二時の大砲不比すべき疵と云る
 ひ一発四隣を震動させ黄色き氣とて蒸気の筒

の煙のどく天を掩ふの盛大なりしめを愈快あの上
 をらんと烏羽僧正の繪きし疵合戦平賀源内が
 物せし故疵論ふも未だ記さざる必誰人か世界第
 一の故疵ありと感歎せざらん既不透し疵の隙色
 不生れし疵分も疵の夏に素より後不すと説くも
 ども僕敢て是を一を論ぜん先天と碧空と言
 雷を霹靂と言ふ水不碧潭碧流あり陸不平原僻
 郷邊鄙あり平城とい奈良の都町寧不言へを
 奈良の都彼の八疵撰とて京九麻あり句の

五五
一
ちめ一戸二戸三戸の南部の部の音小因り土地
の名と為し物るる神戸の伊勢の都會ふく神の庇
あきと明け一爾耳西亜の亞細亜の一大必赫勿妻
亜の瑞西必の往古の名家の隔室庭不埒睽を五
体の皮の絞る目屏へ惣身の肉の餘り尻へ東京の
辞ふあはだ陛下との帝王の車平相必との清盛を
多平親王の庇を放て尻窄めたる謀叛を起し平
三景時を鎌倉武士として鼻と摘まむ扁鵲の漢
土のお医者下和の壁玉を以て世に鳴らす西洋各

五
三
必の帝王への顯理と言ふ名景多く彼徳祿の魯西亜の
大帝彼理の亜米理加合衆必のお使者平郡日置逸
見を何れも日本の苗字あり弁慶とへん慶と読心
瘡気深きと悟らと遍照金剛を唱へて大師信仰を
示すへへのものもへいどへまわし夜入及のそ多書き
廢まら方今の童子之を著る者稀あり獸小豹鳥
小篋鷺魚小平魚虫小蛇變化の動物の數の外草
に絲瓜瓢箬木小抄擺花実と葉の有るみて保つ
兵法を疵の放り方うとらひ兵具との芋午夢の事

うと疑ふ主一ツめく百日の説法をなふる下手を
上手の對ひ句と似る庇へ声有つて形体を見せざ
れを月下の子規小類一白ひ高きも色なき小園り
暗の夜の梅の花小譬ふ人を笑とすも庇又人を怒
らすも庇一発の庇能薬百服ふ向ふの徳と現らす
へ功能尊む小除りつり茲を以て舞雩小風トく
詠トて歸る孫孔子も許して善とせり出んと為る
庇を踵て押へて取り外すこゝ有りともし庇の願
ひに必ず遂んと云ふをゆき薫ひてと笑ひ尻

と捻らせ膝を進めて云ふ僕が見の大い小遠つる庇の音を
雲間の月霞隱見の花の如く夫有ぬろと思ふ斗
り髻髻にツゆるぞ愛と含と與と添て床一かづ
一発震動方六里小音き且るが如き時の僕輩が住
居する裏借屋ふての向ふ三間兩隣りの鍋釜茶釜
龜小踊り雷盆摺小木棚より搏び柱曲を壁破れ
長屋の産婦是が為小血を上げ差配人の隱居驚
いて腰を抜すぬど安政外年の大地震の如く成る
へ一大炮も時辰計り度と窺ひて放せど麻ふ於

五号

三

一
九
千
四
百
四
十
碗
の
飯
と

一
万
二
千
四
百

六
十
椀
の
汁
と

食

故
庄
の
種
と
仕
込
む



五
五

る出物腫りの所を嫌ひざると如何ふせん君未だ獨
身をもを煤灼と得て妻を娶り三三九の盃性返
りつる時ふ當り娛ちて一発震動の世界第一を
放ち出さむ何とて為さむ或ひの喪ふ居り年回
み逢ひ集人圍繞一和尚伴僧真面目顔ある中ふ
居て焼香するふ荏を若一多り外一彼の激雷の
裏きと震いせむを給らすふ由なく包む所あり
是と不便し言ひざらんや物あり各分量あり十奴
の丸の銃炮あり十奴の薬を込めて適宜の音と為せ

百目の丸の銃炮あり百目の薬を込めて分量程の音と為
す座と雖も試み今是と言ん通常の放座
して障子唐紙の隔て有る時ハ僅く隣りの座敷へ
達し其音方五六間あり過ぎるべし而して此座を放つ
あり一食み三碗の飯二碗の汁沢庵の香の物四切湯茶
半盃を瓶に入きて弱茶とす此積り高と以て計れを
九碗の飯六椀の汁香の物十二切湯茶三盃を以て一日
の食と一町四方へ音らす座を放り出すハ九十
碗の飯六十椀の汁百二十切の香の物三十盃の湯茶

と費し、まゝ一里四方へ音すめ、三千二百四十碗の飯
二千三百六十挽の汁、四千三百二十切の香の物、千八十
盃の湯茶を費し、是を六里四方へ音うけ、め、一万九
千四百四十碗の飯、一万二千九百六十挽の汁、二万五
千九百二十切の香の物、六千四百八十盃の湯茶を費
して、以て度と為し、初め、十二時の号炮の如き大砲
へ出るあり、二千三百二十日、ふん、六年の食量と一日小
食へ、どれを心の如き、庇を放つと能はず、六年の飯を一
日小食ひ、心と圖方も、ふん、大砲を振ひ出、四冊八軒の

人小肝を潰させ、お長屋の者と、撥グー、果へ差配人より
店放逐の斜と、蒙り、世界第一と言ふ、何の益り
有るこ、小物、の、順序、の、仮令、を、庇と震ふ、小初め
の、蟻の、鳴く、如き、音と常と、次第、小、木魚、程の、声
と、漸、牛の、吼る、音と、或ひ、喇叭の、声、進と
亦、奈良の、大鐘の、唸を、著、而、大砲、激、発の、音
き、我、願、ふ、可、あ、ん、不、庇、玉の、狙、ひ、あり、と、餘
りに、結、ら、ぬ、川、舟、あり、と、言、り、と、高、鳴、啖、て、赤、点
頭、僕、今、の、世、の、人、と、なる、ふ、六、年、の、飯、を、一、日、小、食、つ、て

あるとも猶未ど腹小足らざる程の始計を一日の
版も食うれ、く活なぐ、自己の活計とする本業
と差おきそ、関係居る者多き、事業の做し易
げに見ゆる故あり然れども、其实も六年の飯と一日の食
ふの力とを、数の勉強なき、み於ての成就する物甚ど稀
あり、因りて、速に出まざる事と願ふ、あ、大砲の音や、
齊しき故、底まど面白、かしんと、茲に注意のするもの
か、る元来企て及むぬとあるを以て、是が為、小財を散
ト、屑と潰、中、凡の無多、有ることを、あ、け、を、物、を、を、以、時

日と費やして出来もせぬ事に骨を折る者より、
増えん、然れども、僕が志す所、と、餘り、答へる業
あり、何れも、念願の、と、止り、底を、放る種、の
米と汁香の物を買入る、銭と金と、残儲け得る家
業の稼に、勉勵して、六年の版を一日の食ふとも、差支
えざる、板、心掛、ん、在、界、第一、の、う、り、り、切、り、た
りと、云、ん、時、忽、地、耳、我、貫、ぬ、き、十二、時、の、大、砲、の、音
ズドン、ビリ、リ、
或人、難、ド、て、此、件、い、う、に、底、と、論、ず、き、を、と、と、後、理、煙、の

如^{ごと}ハ捕^{つかま}へるに所^{ところ}をけねを醉^{まよ}客^ののブウ^くと少^ま劣^ち
 まり^まと編^{へん}者^や定^{ぢや}ふ答^{こた}ふ庇^への論^{ろん}ふ実^まダ有^あた^た鼻^{はな}
 持^{もち}へ成^なりま^ます^すま^まひ

寄笑新聞第五号終

東京本石町四丁目 岩本 忠 藏

同京橋彌左工門町 大島屋傳右工門

横濱弁天通四丁目 中屋 銀次郎



上州高寄田町三丁目 柴田 源 作

信州上田原町三丁目 田中長右工門

同長野吉田村 長田 忠 之 助

武州熊谷本町三丁目 和 田 貞 節

東京照原町 惠比壽屋庄七

本局 寄 笑 社

橋爪錦造編集

寄笑

新聞

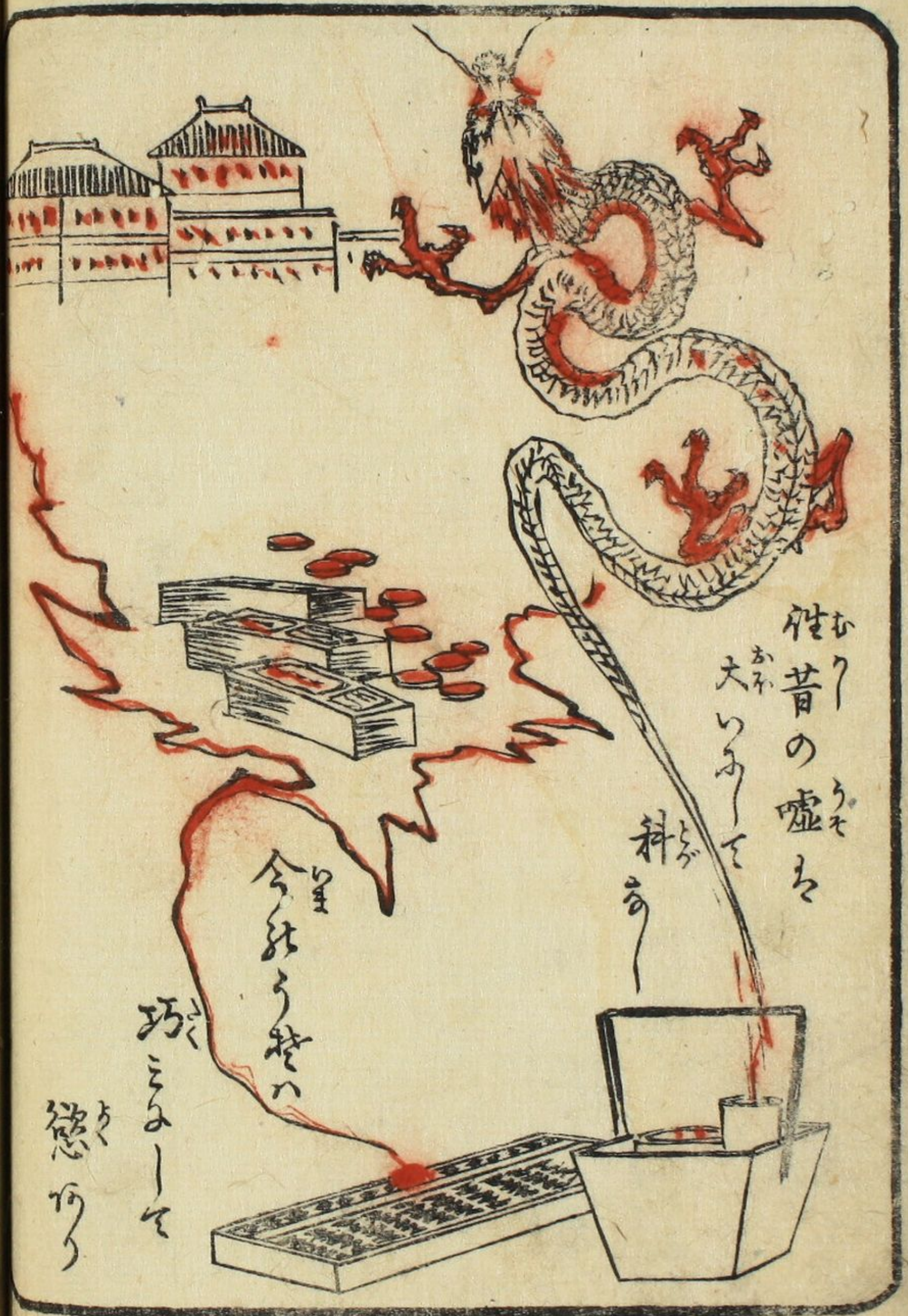
第六号

了持論

石家芳画

定價三錢五厘





寄笑新聞第六号

東京

橋爪錦造編集

三日月の時の相場ひらあて光り望月もちも十五日あの限かぎらぬ
 太陽曆たいやうれきとありたきどりの空説家うそつきむろりの依然いぜんとして所ところ
 をかへて舊弊きうへいをまのりの肉化にくかの美味うまいがいまどいまど脳乃のう
 なるへ深渡ふかわたらぬ故ゆゑりと必かならずを却かえつてやくやく當壚風とうろふう
 と賞翫しょうくわん一帽子ひとぼうし襟えりまききに五分ごぶんでも透ぬすフウネルの
 襦袢じゆばんを忘わすれと少すくし懐中かいちゆうが温ぬるけを煉ねん化石がせきの舎しや

ふもね飛すまねきさむ張あり大あきなるま支まをのと云ひ根る
草ぐさの干ひあぐり居るみ貪とんぢや着あせぬ人ひとくら散髪ざんぱり天あま空そら
のおりととせんと求もとめもせぬみ同れありまる島原しまがらへ
んの髪うし結むす床とこなり漢かん語ごとよみ者下しも刺さみ髭をすくせ
なぐく阿娘あにょうのためみ懸けん恋こひさるくやうみ注ちゆう
意いて職掌しやくじやうとそすと冀き望ぼうすと言いバ下割しもハ怪有ある
顔かほして一昨おと日ひの晚天たん鼓ぶ羅らと牛の烹てみで食傷くわうを
盡つくし大あ苦くるしとをきりやしとガ阿娘あにょうとみ物もののまど食
ととガおれへやせんと歩あき傍らより固こ餅もちとちの者

口くちと出し何さ々左さ振しんで阿娘あにょうとい即すなは妙めうの洒落しやくらくどらう
此こ方かたの万八まんガアリア宜い新しんぐんど固隘こくがい烟えん管くわんを並き
「新しん軍ぐんもこの頃ハ種されといえて鱸ろや芋をりり
かてに遣つく居わるよ僕わが語ごハ僕輩わがが紫下むすみ求め来
らを裁ざい許しよ種しゆとう授じゆ與よしてきりのみ万八まんハ実は佐
賀がの戦争せんじゆうぶぐんみやアすてきと臣しん種しゆが有とせ何
とちりくつく先まの大将しやうが江藤えいどうといふ英雄えいゆうだらう官
軍ぐんがみりかとむと城の中かくどんく歩出しと大
炮たうがききぞ鍋なべ島しま勢せいどけありと丸と思ひの外あ鍊れん紫し

銅で鑄と汁鍋焼鍋烟禍うんち鍋の類ひで手の
附とのもみり口の附との有りありゆる禍を禍
の降る如くおすさまじく少出るとが寄人の大勢
たつ事ともせだ攻つけ防禦既お破れんとする
と一際烈しく城中よりお出るとの牛鍋あや
も禍をせらるるだ黓黓多ぶ寄せらるるど、その
でよく実のつる奴どうは是をめぐると兵士らの
合戦お構はず食ひ始めと牛鍋あやも禍丸煮
のどぜうあぶるとと食と者の強く黓黓あぶらせ

鍋あぶると意気うるとのいれねして弱うるとさう
どまう後張と勢いど湊依越え柵を破つて攻むと
城の中あ一人も居ずササ知でよせての隊長グ腕とく
に食遣とまる者の世お幾許もつるが食せ逃と新発
明の反對齟齬ハテ今の浮立ハ佐賀さ々どなるアとい
何根どく固餅「ま」と吹とめると久しいのどまよ
りう実地お面白けりとの有との台湾の時日本
諸軍勢が彼の地の瑯瑯港へ船をけけ直ち又陸へ
攻上りたるお敵を逃て一人も居らんとさうどが百度

小近い暑さの為小碛易し山の間の涼しき平
 地へ天幕を張り本陣と居て各船中の勞れを休
 めて居たり時ふ一陣の怪風さと吹おろし満
 天の黒雲墨を流し強雨あふふ降出づ勢ひ盆
 を傾むくる如くみて山々の水俄々おまの
 谷合へ落重なり平地たたらもち大河と
 變り激流日本の陣營へあかりけりや諸軍
 勢是が為ふ生るぐぐも腹お葬られんうと
 見えたると総軍の大將錦の袋の中より水
 天宮の守り札と取りどし逆まき寄る水の中
 へ投げ入れたるふ

不思議や水も左右へこりれ只の一滴だも
 陣營を浸さず大難を遁れたるを早く諸軍と
 山上へ移し天幕で張る柱を建てる穴を掘
 らんとサアベル亦ハ木竹を以て穿つに地
 中なる岩石あるを一二寸の深さあり
 至らば此時総軍の大將も金比羅を念
 じたり象ふも劣らざる鼻高男忽然とあ
 らりて被の大きを鼻といくらせ大地へ
 ずをうくと通すも千枚どりめく綾河半紙
 を突より易けをを救の柱穴も鉄無く掘
 る仕舞いとと真面目くさうて言ふを床



江藤のさうりど
 佐賀の城中より
 綱をうちぬく官軍は
 後をさうりする

圓

の親方がかきまゝ「且那方のいもんを嘘ッわろ〜だろ〜
 面白く移人何ても近おろで大造のい支那の軍さ
 何と言さつて先が大国ふ此方の先陣が薩州勢と来
 て居ろ〜〜解報六ろ〜〜かろ〜〜く支那勢が破
 ら〜〜逃だ〜〜と薩州勢が逃うけて關帝廟の前
 へ性と思儀や雲霧のあひどふ蜀の関羽と書と一
 流れの旗ろ〜〜これ顔の赤い髭の長い大将赤免馬
 ふ乗ろ〜〜これ八十二介の青龍刀と振り日本勢
 の中へ駈入り當ろ〜〜任して難〜〜る有さぬ威風

凜々敵〜〜が〜〜皇國の諸軍いろあき渡りすの敗
 せんとありたる時蛇の目の致つけたる旗大氣の中ふ
 飄り一人の大將大身の鎗と引ひどき関羽が前に
 立ふ〜〜がり加藤主計頭清正とよ有り勝更さん
 と呼おまを彼方も馬を進めろ〜〜青龍刀とあり取
 りのべ七日七夜息も次ず戦ひ〜〜が関羽が力やろ
 やく勞れ馬と返して逃どすゆゑ清正これと追ん
 とせ〜〜ふ忽地後方で破鐘声ろ〜〜が押〜〜待とと
 止むる者あり顧ろ〜〜を虎鬚左右へ逆だろ〜〜下道

の假面めんのどき面めんの大將たいしょう丈八ぢやちやうの蛇矛だまうを横よこへ食くひ付つんず
 勢いきほひるう清正きよまさふどろき汰あんぢの維これぞ名なのま「ハイ張ちやう飛ひの
 替かりあであなないまんん此あ時ま隅すまのまろろふと居とりし西せい洋やう服ふくを
 着きるる男おとこまま中ちゆうへあややちちりり出で「先ま刻きツつううのの祿ろく「のの時とき
 ととがが佐さ賀が台たい灣わん支し那なふふ於おててりり左さ柄へいのの事ことががあありりはは、
 とと今いま一いつ應おうあありりふふ承しょう知ち「ののたたいい次じ第だいふふ因よりり替かめめ候ま
 ああのの棄すおおきき難がたいいとと否いなふふ緘せままれまれれ万まん八はち固こ餅もちままのの床とこの
 親おや方かたととももぐぐ顔かほ見みああののせせああままげげたたるる風かぜ「てて居ゐたり
 「がが固こ隙き「台たいここんんののとといい落お「嘯せう「佐さ賀がやや支し那なののい

實録じつろくとと咄はなきき万まん八はち「何なん柄へい「ててととんんどどとと此こ方かたのの差さ裁ざいの
 嵯さ峨がやや御おん室むろのの花はなささくくのの嵯さ峨がでで肥ひ前ぜんののささががのの事ことで
 へへのの親おや方かた「佐さ賀がづづままのの代しろりりふふ台たい灣わんでで引ひくくけけ大おほ碎さいふ
 成なりてて支し那なツつととももののどどろろ「嘯せうツつ吐は「とと始はめめととけけ西せい
 洋やう扱かくのの男おとこ「否いな々々らら拵たて「とといい言いささぬぬおお前まへのの名なのの何なん
 とと云いふふ固こ餅もちままとと「頬ほをを張はらら「落お「嘯せう「ととああとと
 てておおれれ「とと食くふふここけけのの物もの人ひと西せい洋やう扱かくのの男おとこ「名なののららああけ
 ままをを名なのの「ああいいでで宜よろいい何なんもも替かのの筋すぢ「沙さ汰たふふ及およぶぶと
 言いすすてて三さん人にんとと見みままいい「出いくく往ゆくく後あとふふ万まん八はち固こ隙き親おや

方ありけみ多きき 万八一落し噺しや洒落と言て悪
 いとつふ布告か出さうあらん 固餅一何ぢんるこが
 有るものう 祝方一りりとい 彼奴ハ何どらう 漢語一あ
 りヤア兵隊の唼ハふきヤ 固餅一あふ 唼ハふきどト
 万八一いやぢまて 祝一祝方一りり 祝一ハテ 唼ハ
 ふきどらう 螺吹とへてませて 性とのどらう

世ハ是らの類ハふ齊しき 嘘なる一 残する癖ある
 之のまありて 譯あきとふ人となむらう 痕形も
 き 噺一残あらうらう 兀る尻も 蛙の面へ水とも

とずあやアくくして 傍うらまうと 嘘言と 咄き身の楽
 一とと為らぬ 嗚呼何の理ぞ 江湖上のと 甚ど繁
 一方今の新文と見ても 話一不差つうえあるべうとぞ
 衣食住ハ多くの 雑費を掛し身と持ちちるがう 何の
 直歩もなき 嘘をけき 螺吹よ 鏢炮よと言れ 自己
 の口より身己の言ふと 残人の當みせぬ 振ふるの
 愚鈍の第一等 ありく 無論多し 嘘をけくお子さ
 ま方の物言ふをみ心をつけ 必ぎ 怪とめうべし 窮
 理学ひらり 地獄の景気悪く 成り一 故 焰磨

王の一際勉強一近ちかおろ新發明の釘抜くぎぬきと製せい一噓うそ
 とはく者の舌しほを抜ぬと言ひなむ此作者も直たださる舌しほ
 強拔かたるべ一恐縮戦慄まじろ穴あなかゝこ

寄笑新聞第六号終

東京本石町四丁目

岩本忠藏

同京橋彌左工門町

大島屋傳右工門

横濱弁天通四丁目

中屋銀次郎



上州高寄田町三丁目

柴田源作

信州上田原町三丁目

田中長右工門

同長野吉田村

長田忠之助

武州熊谷本町三丁目

和田貞節

東京照降町

恵比壽屋庄七

本局

寄笑社

霞の眼
洋のま
松

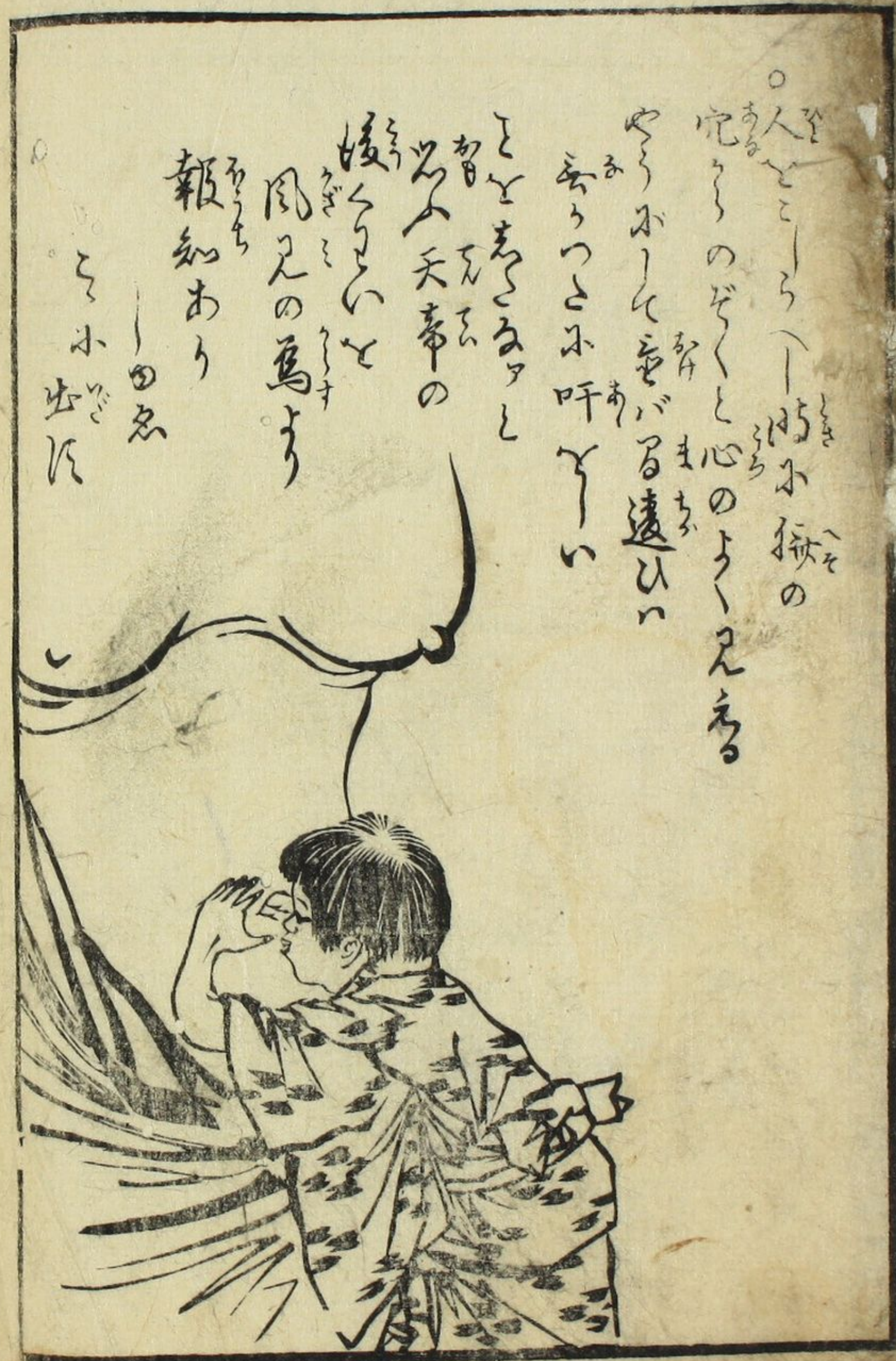
寄新
笑
軍

第七号

編集



明治廿五年



人々こころ一掃小振の
 定々のぞくと心のよくと見え
 やうおしとをばる遠ひい
 云うつと小呼やい
 ととまるとまると
 智天帝の
 媛の馬より
 報知あり
 小出は

寄笑新聞第七号

の我々眼鏡歐行論

東京

橋爪錦造編集

是の此度の新發明西洋見眼鏡の根元歐羅巴洲の英
 吉利、仏蘭西、魯西亞、普魯士、奧地利の五強國より伊
 太利、和蘭の首府港々の景色を残り限る巡覧
 ありて價へ二銭のお慰を代へか戻りみて宜し。サア
 後ト第一番み存るの英吉利の首府龍動の風景
 町と東西南の三大區み分け豎四里横三里の中を

流るゝ達迷塞河の海の口より二十里水上龍動橋を
長サ九十二丈八尺彼方の岸に魏たるの譏事院の宮
殿此方に高く聳へーのセントポウルス寺の高塔鏤
道る地の下屋根の上ふも有り是を走る蒸氣車の
数ハ三万三千三百三十三電信機線の線と蚊の巢の根
み掛けたる故日本あゝるを大天狗小天狗西洋でハ天
帝のふ使ひが折々此線に引くり鳥指の手ふ落て博
物館へ出ると云ふと儲まゝ第二番み存るハ仏蘭西
の首都巴黎斯の全景家の造りの七階八階煌々為

るのハ玻璃障子照々光るハ瓦斯燈の明り廣場の真
中み水を吹き上げ水晶の柱を建とやうみ見る處
ハ王宮の表門前玻璃の屋根を掛けたる往來あり
地の下み船を遣る溝河あり「ボワデブロン」の花園
みハ矮豹猫婆さゝぬ子供を嫌いば郭外あり十六
城ハ先年普魯上と合戦を為し時百万餘りの強
敵を防ぎ止めたる無双の悪害町を横ぎり流るゝ
音み波えゝ塞納河追手み帆掛ゝ走る船蒸氣の
車の轆と廻るを次ガ普魯士の首都と言ひゝと

一六号

三

まぐろ見する眼鏡を覗き終りて一人の祝爺木戸を
んふ對ひ私グ倅も欧羅巴どの亞米理加どのと遠
ッ走りて為とがるうう此眼鏡を見せふ為来ませ
う間もかからぎ路用もりうず大い徒やう今の若い
者ハ分別もよく異玉へ性どがるもの困るのサと私
終そむふまうろの長き羽織ふ赤い襟まじり狸の
皮の帽子を冠り縮緬おらうの引扱をメー人まで
洋学修行の生徒あるべー祝爺お向ひ僕輩もなふ
歐行せんとも冀望す然れども豈分別ありんや俗

間画餅を以て譬ふ寫眞の繪像みての愈快とてげ
がこく赤阪の看板に對すも脈ハ脹れまじり繪ふ書
きたる物などて見く足まりとるる未閑の人の上
みして並以て是を野蠻と俵一む謹々めされと白
眼つけらまじ老父ハ天窗をみるであぐら一実お至極せし
仰まりシテ貴身おの何を眼当として欧羅巴へハ性
んとするや教えた多人と言ふと歩き此方の若者
「さきとある第一ふ各種の學術を修め第一ふ地
理風土ふこころ第三ふ人情政体を察し知見を弘

一三

一三

ある階きざいとするあり老父おやぢ「然しからる今貴身いまきみの学問がくもん何
等どうあるぞ若わかしの答こたへと「二級ふたきゅうあり老父おやぢもと問とふ「日
本の地理ちりのいふ若わかしの答こたふ「僕わがの東京市とうきょうし中の産
北きたの板いたを南みなみの品川しんがわ四里よちり四方よしかたのわう知しり「所ところあり
老父おやぢ手を少すくち「果はたして倅せがれと同断どうだんあり貴身きみ学問がくもん二
級きゅうとなつても河内かみのの中うちも教しえを受うる師しのつと
一ひと歐洲おうしゅうへ往ゆき修行しゆぎやうをするもいろはのいろはちり
ぬるのちりぬる成ならる物の掛からぬ手て程ほどあるを
宜よろき夫それも学がく科か第一だいいち等どうありて日本にっぽんの教しえを請う

くべき者ものなく亦また見るべき程ほどの書よみをけれを英吉利いぎりす
おまれぬ蒙まう西せいなまれ往ゆき学まなびたる人ひと往昔そのくみの入唐留あつしやうりゅう
学生がくせいもまた安あへ倍べい仲磨ちゆうま吉備大臣きびおほじんとる博多はくたの安
え有りてのち他たの地ちへ渡わたりぬ歐羅巴おうろぱへ往ゆみの旅中りよちゆう
の日ひうず彼かの地ちへ着ちかして尻しりの居すまるまぐの日ひ數かず歸かへらん
として支度しどする日ひ數かずあり是これを合あせて精筭せいさんまじること
殆たいてい半年はんねんを費つひやさん然しかるを家いえに在ありこの半年はんねんの
月つき日ひを勉強べんきやうするを一二冊いちにさふの書よの多おほくひ覚あがえ且かつつ
昔けいこ古ふるの入費あひひ食料しょくりやうともふ三十四さんじゅうよふ過すぎず彼かの地ちに



○今様と
古風の
心の覗きめぐみふ開化と

因循の議論をかめず

あやうや
まゝに
唱

七号

五



英吉利の
全景

ふらんす
の
まやこ

いたりやの
まゝに

一

四

ての五六田百兆ふても猶足らざらん月日つきひを費つひ一金銭きんせんをつひ
や一自己おのれの拙あやうを異邦いほうへ持もちこたり皇みの耻ちを外人がいにんに
示あし我わがの地の財室さいしつを他たに必かならずへちりすの最もとはろりき
業わざめもあらず本朝ほんてうへちりて不忠ふちゆうといふべし
理風土りふうどを知らんとする我わがの國くにを先まとあらし後のちに彼の
土どの事ことも且かつらた地勢ちせいの豊确ほうかく物産ぶつさんの監けんぐえ彼かれと是
とをたくりえき益えきとるるとおりけれど我わがの國くにを知ら
ず彼の必かならずへ至いたるとも控とらへず整ととのへからん若もし夫
あらずを餘よこふと後のちに第一だいいちに伊勢いせの太廟たいぼうへ参拜さんはいし

次つぎに桓武けんぶ天皇てんかうのうう代々たいていの帝ていの都みやことあらし人ひとる
西京さいきやうふよゆ難波なんぱの府ふ奈良ならの旅籠りやうろうや三輪さんりんの茶屋ちやや
よよの花更はなさら村むらの月つき風情ふうせいの龍田りゆうでん河か知葉流ちえりゆうと流なが
わく末すえの三島さんしま女に布ふの化粧けいそうの水みづの井い乃の源みなもとは富士ふじ乃の雪ゆき
四國しこく九州きゅうしゅう北海道ほくたう千島せんしまの奥おくと巡視じゆんしして名將なやう智臣ちしんの
あしと尋ね功績こうせきをかき小報せうほう由よし一いつ矣やぞ邦外ほんがい無縁むえん
る歐洲人おしやうじんが古跡こせきをとひ修行しゆぎやうさるりの月つきと日ひとあら
ら浴用よくようと費つひやさんや学向がくけんへ我わがの東京とうきやうふも事足ことたりつ
地理風土ちりふうどの自みづかを先まと為なすべく学がくび憂うれしく知見ちけん

七

八

せまけきを政體人情を察するに能はず只港の
模範都府のそんトヤ市町の立派と見るまで
ら蒸気車船電信機瓦斯燈ハ鼻のさきみ既
在り築地橋をまゐどの居留地へゆき外へ人ら
うまふらまひと家の造りと一見せしる爰の
のぞき眼鏡と見えなると人実地を踏すとも大
体ハ察し得らるべし然るを今の若口祿を
我許えんの月と日と多くの金錢をばひ申
兄弟ハ苦勞とけり辛く波濤の難美と云のま

彼の地へ修行し性よくとく下等の暮しもありか
ねれを日々の物より莫大ふく中人以下ある長
續かず然れどあろくの人の中ある成業するも有
るゆきと普通のこのハ半途あり彼地より帰
り来り我らと歐羅巴傳習の學者ありと学問
の熟不熟ハか官位をとりて来しとくありハ
心ハのづと驕漫し知己朋友ハ云ふもさうハ伯父
伯母ふふらるまが舊弊との同化せぬのを見下
剩へ我が生れたるハの事と半開るど卑し

七号

二

氣きがううわわむむりり高たかくくももうう覺おぼええてて来きししのの花はな女よめの
直ちやう段だんとと引ひ張ぢやうのの買かひひとと眼めふふ止とままりりししのの宮みや殿でん家け
居ゐのの美み麗れい耳みみふふののこころろのの調てうままんんのの炮はう声せいとと踊おどりりの
囉らししののとと彼かのの女にょ人じんららがが狡たう猾くわうももりりふふぢぢひひひひととま
らら利り慾よくももああららずず或あるひひのの拵ぢやうのの奢おご侈ちやうもも化かせせららとと手て
道だう具ぐ衣い服ふくををかかききりり美み酒しゆ佳か食じきととままののとと香かう水すいをを
髪かみへへ塗ぬりり石いし鹸けんでで顔かほをを洗あららふふのの奇き麗れいずずききふ
女にょととややううああままききどど手て拭ぬひひでで鼻はなををううとと雪ゆき陳ちんへへ性せいと
手てとと滌せいががざざららんん何なんれれししととままのの黄わう肌き背せい魚ぎよのの刺さ身しん

の山さん葵きままややゆゆやや酸さん味み噌そうののつつううとと嫌きらひひ牛ぎゆう豚とんをを以もつつ
上うああとと佳か者しやとと一いつ米まいのの飯いひとと卑ひししとと蒸む餅もちをを貴たかししと
一いつ懶らん惰たとと彼かがが食じきののああのの熟じやくせせどど学がく問もんののかかへへつつく
家いへもも在ありりししののああのの追おひひ越こええままののひひりりををささみみ知ち
見みとと増まししてて来きししるるどど倍ばい増ぞうすすれれ識し
ららううとと文ぶん明めい開かい化かととチちヤやすすみみやや二に銭せんののおお慰なぐさととでで此こゝ
眼め鏡がうのの繪ゑとと祝いのちいいてて居ゐれれをを奢おごりりののほほとと憂うれひひををくく
高かう漫まんふふああるるもも無むききとと我わがが生うままれれしし女にょをを嘲あざわりり譏しららばば
ああももああららずず英えい明めい俊しゆん才さいのの者ものにに拾く別べつ十じゆ人にんああららずずをを理あ

る夏^{なつ}として^{して}外國^{がくこく}への^へ往^ゆぬ^ぬ方^{かた}が^が増^まし^しあらんと^と存^{ぞん}ト^ト
 故^{ゆゑ}思^{おも}はず^ず失^{しつ}敬^{けい}を^を言^いひ^ひたる^たありと^と眼^め渣^ぢと^とら^らき^きの^の水^{みづ}鼻^び
 を^をす^すり^り上^あり^りて^て論^{ろん}を^を木^き戸^ど番^{ばん}老^{らう}父^ふの^の手^てを^を
 て^て「[「]らり^りや^や此^こ方^{かた}の^の且^{ぜん}那^なの^の社^{しゃ}作^{さく}る^ると^とり^り私^し見^{けん}世^{せい}の^の眼^め
 鏡^{かがみ}を^をお^おの^のど^どき^きを^をさ^され^れを^を歐^{おう}羅^ら巴^ぱの^の各^{かく}必^{ひつ}へ^へは^は往^いり^りし^しる^る
 同^{おな}し^しと^と已^{おの}が^が田^たへ^へ引^ひく^く水^{みづ}か^かけ^け論^{ろん}の^の媒^{ばい}灼^{しやく}口^{こう}の^の俗^{ぞく}ふ^ふ言^いふ^ふ
 嘘^{うそ}々^々出^でる^る実^{まこと}の^の嘲^{あざわら}し^し高^{かう}賣^{ばい}と^との^のあ^あら^らん^ん然^さも^も有^あり^りあ^あん

寄笑新聞第七号終

東京本石町四丁目

岩本忠藏

同京橋彌左工門町

人島屋傳右工門

横濱弁天通四丁目

中屋銀次郎

上州高寄田町三丁目

柴田源作

信州上田原町三丁目

田中長右工門

同長野吉田村

長田忠之助

武州熊谷本町三丁目

和田貞節

東京照降町

恵比壽屋庄七

本局

寄笑社

寄笑

新

寫

第八号

商法論



定價三錢五分

五需
芳筆

編集

○ 儲んと欲まれを

買人多く

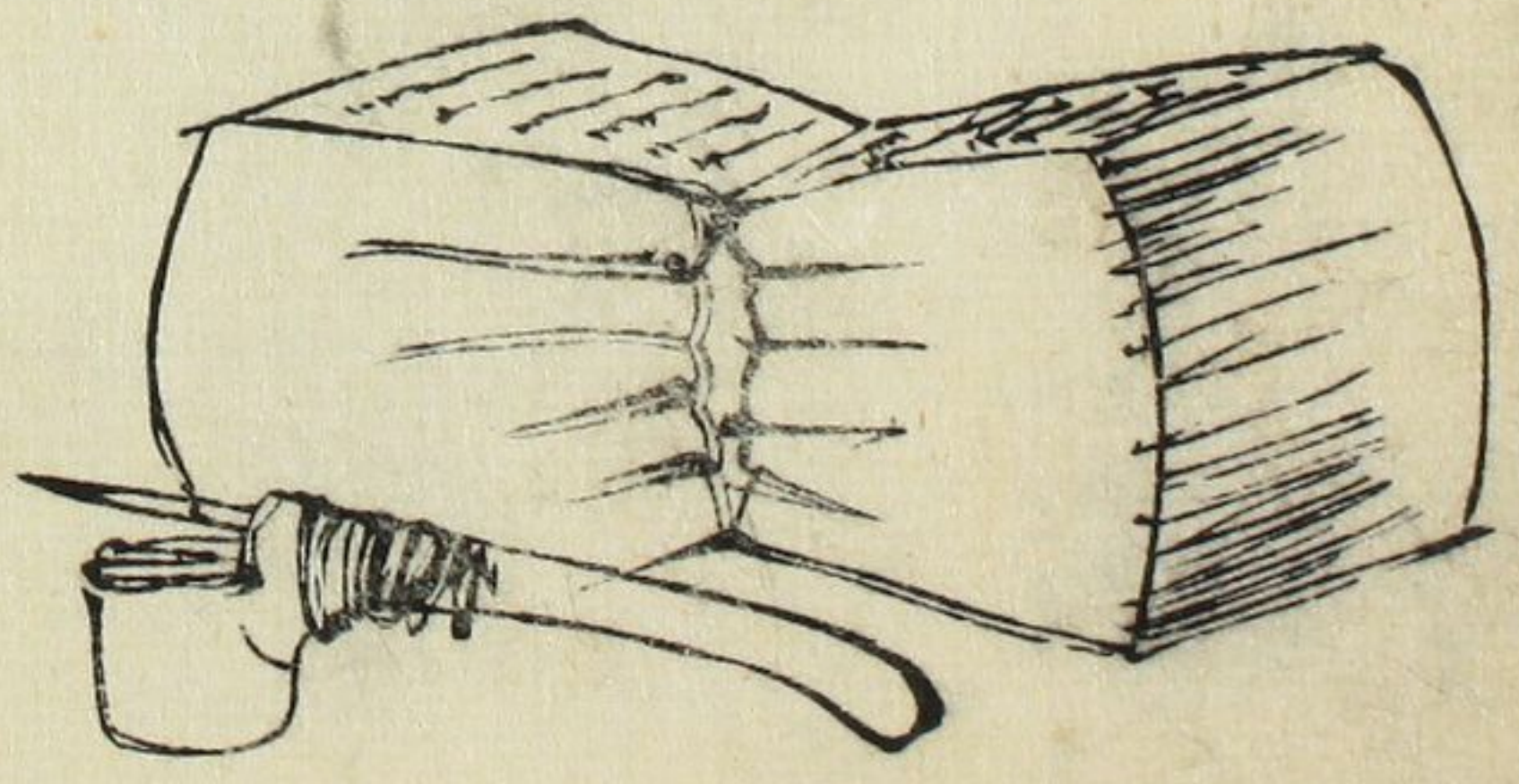
賣る招ふすれを

食をむ

商多いう倦るる客り積る月々

晦日の帳末

問へ



寄笑新聞第八號

商法論の一

東京

槁爪錦造編集

○

往昔の諺ふ曰長袖よく舞ひ舞錢よく商ふと然れども是ら舞ひの技ふ達せしその商ひの道を知りたる人の上あておこぬふ錦襦袢子の衣裳を着せ軍太夫君ふ巨萬の金銀を持まるとりカトツピキピの神樂舞ひヒヨコリくの俵をも商ひ得可けんや農工商の道何とも身を立て家を齊へ命の

を結び止むる営みとて人間第一の修行と云ふ
虹蜂蜻蛉の天窓の頃より定限七年の年季を入れ
農夫職師商人と夫々の業を學び活計を立んと
為るを普通とす然るふ七年の定則通り湫して業
み疎くして自立ふなるを得ざる者も間あり深く
察し厚く思ひ食殿建立の容易くざらざるを知り
ぬべし茲に一奉還士あり其名を南楚出茂作と
呼ぶ官より賜えり資本の金を無き中み然
るべき商法を開くんとして始め九儲けと言ふよ

り茶子と監え一が亦平らみ賣んとて塩煎餅と賣り
是の何れでも香梅焼 どんど趣向のはげけ豆胡麻入
り芥子入り山椒飴の色々み目筈一儲けの金ハ荒物
屋大取よりハ小間物屋見世の栄えハ万代を古道具屋
ぞ宜かきめと大概決着するものくく猶覺束なく思
ふより畔り述の賣ト先生方へお終ふ性きたらみ賣
ト主人遂一吹き舌を鳴いて言ひけるやう今や王政
復古世界大变革の御代み當り歸農歸商の士族
ちまづごまぐ亦商人とり人とも従来の産業衰へ新

規ふ事を起さんと為るも少なりと然も商人
の賣買の道不馴と商法の容易ならざるを知りたる
故勉強も格別ふて今までの活業の力と新規の活業
ふ及せむ士族の見世を閑くともちがふあり歸商の人
々の若き資本金多き唐物屋料理茶屋藝者屋など
と花美やうみ見世を完き資本金少き汁粉屋牛鍋
焼芋と夫相應の店と設け各扱ふ品物を仕入を上
手み是を商とんと鴉のま似とする雅と云ふの譬
へみ整一見世を閑き代物を積むの商法を行ふ道

具だてあり道具とての資本金さ人有むを誰ふても倣
得べ一品を賣り品を買ふの術あり術の学をずして出
来るものなり倣令が碁を圍んとして盤を求め石を
買ふ盤へ則見せめて石の即ち代物あり價の金さ人
出せむ盤の見世と石の代物との調へ得ざる者なし
而し盤の見世み對し石の代物を握るとも碁を
囲む術と知らずして争でう倣し得ん今此處不廣
らうあり地所あり良き材木十分不備あり能切れ
る大工道工み富たむを美厩ある家を建んと欲

貴身手自ありらんよと云へむ、
大いある普請と職の者、
無理を頼るといふべし、
材木大工道具の代物あり見せあり、
と造築を及むずし、
帳尻の約り合ぬあき知りぬべし、
行とあり、
日み僅う二十又り三十又るれど、
貴身手自ありらんよと云へむ、
大いある普請と職の者、
無理を頼るといふべし、
材木大工道具の代物あり見せあり、
と造築を及むずし、
帳尻の約り合ぬあき知りぬべし、
行とあり、
日み僅う二十又り三十又るれど、

圓り儲け限りあり、
ずしての出来ず、
不於てあや、
職人の業と遠ひ資本金と心と身体との働き、
惻免強朝夕ふ怠り、
雖も出来ぬ、
貴身実ふ高法、
出茂作頓首して、
ひまうさざと、
圓り儲け限りあり、
ずしての出来ず、
不於てあや、
職人の業と遠ひ資本金と心と身体との働き、
惻免強朝夕ふ怠り、
雖も出来ぬ、
貴身実ふ高法、
出茂作頓首して、
ひまうさざと、



〇よの代物と
 さまりては
 べんきやう
 さまりては
 ざねが
 代物拵ひ
 石瓦とあるひしも
 かせけくうせくも
 異色いろのとあつが
 おやぶんのちひまゝと



〇てのものを
 かせたみ
 るすつ
 一幕立
 だてとて
 あらう
 女房の日本
 異色
 多一とぞ

八景

四

ぬ前まへの身体しんたいを熟じやくすか肝かん心しんまり明日あすより朝あさ暗くらき
 中ちゆうの起おきき内室ないしつが飯いひと焚くうち表おもてを掃はき見世みやまと拭ぬぐき
 食しょく事じが漱すすや吞のや股もも引ひ尻しつ端は折をで草鞋くさざしとときき膳ぜん
 籠かごの中ちゆうへ石塊いしけいでも瓦欠わらひでも目方めがた十四じゅうし五ご貫位くわんゐの物ものを入い
 れ天秤てんびん棒ぼうで荷にひ成なつたけ足場あしぢやうの悪わるさうな所ところで半時はんじま
 でお五里ごりをりり歩行あゆて来きり家うちへ帰かえつても草鞋くさざしと脱ぬが
 上あり端はへ腰こしを掛かとま澤庵ざえんの香かの物もの四五四五切きれぬ温ぬる
 茶ちやで飯いひと食くひ箸しやくと釜かまと直ただぬ亦また膳籠ぜんかごを荷にぎ出だ
 入い目頭めがしらまでお再またひ五里ごりをりり歩行あゆて帰かえると其その

手てで膳籠ぜんかごの中ちゆうの石瓦いしわと出だして片付表かたづけおもてへ水みづと蔭かげき掃は
 除すぐ亦また香物かうぶつで飯いひと食くひ大急おほいそきで湯ゆぬ這こ入り戻かえる
 と遅おそくと明日あしたの支度しどぬ膳籠ぜんかごへま石瓦いしわと語かたり其その
 日ひの小こ巻まひ帳ちやうと附つ十時じゅうじまで何なにありと夜作よるさくと十じゅう
 時ときの鐘かねを聞きとら見世みやまの戸とメりして除すぐ寐ねぐけ翌あした
 日ひも亦また暗くらいお起おき昨日きのうの通とほりぬ雨あめでも降ふるう風かぜでも
 吹ふむ猶なほのと朝あさも早はやく荷にも重おもくして出でりけ三十さんじゅう口程こうぢやう
 勉強べんきやうとくら此度このどの大きおほき葛籠くわらへ矢張やそう例れいの目方めがたなど
 の物ものを入いれ麻あさ風ふう呂敷りふしへ包かを脊負せおひ出だして膳籠ぜんかごの時ときと

同法どうほうみみくく亦また三十日さんじゅうにちををりり歩あるま行ゆ荷かふふとと奢しや負おふふ
六十日むそくにちのの修しゆ行ぎやうググ誥ごどどらら夫それ々々腦なうのの立たののとと堪こへへるる誓ちか
古ことと為なねなををああららぬぬ兎う角かく士し族ぞくにに居いるる人ひとのの買か入いぬぬ暴あるる
とと我われ言いふふとと失しつ敬けいとと何なんとと勃はつつとと怒いかつつとと筋すぢとと出でるる
がが高たか人ひとととあありりててへへ腹はらとと立たぬぬみみ限かぎるる仮か令れいをを荒あ物ぶつ高たか賣う
とと始はととめめるるとと買か入いぬぬがが来きてて是これのの妙めう。貴き相さうのの面めんのの賣う代だい物ぶつ
のの膏かう板ばんとと搔か捷せつ天てん窓そう扱せ子し顔がん肌き目めがが輕かろ石いし。色いろがが炭たん卷まき眉まゆ毛げ
がが羅ら紗しや刷せん毛げ眼めがが細こ螺ら口くちがが陰いん囊なう火か鉢はつ耳みみがが本ほん造ぞう酒しゆ鐺じやう
のの口くち木き鼻びがが眼め鏡きやうのの看かん板ばん鼻び毛げのの鬼おにだだららしし。髮かみがが梳し櫛し

箒はら定じやうめてめて何なんぐぐ大おほ櫛し小こ木きななどど嘲あざわ弄ろうるるみみ遠とほいいるる亦また八はち
百ひゃく屋やとと始はととめめるるをを天あま窓まググ東とう埔ぽ塞さい毛げのの玉たま蜀しやく黍し顔がんのの
つつべべりりおお平へいのの長なが羊やうををななくくてて日ひ増まのの唐たうのの羊やう肌き目めがが袖そで子し
鼻びがが薯しよ蕨げつ眉まゆ毛げがが鹿か角かく菜さい眼めがが渦う卷まきのの燒や麸ふ耳みみがが木き耳みみ
口くち燒や塩しんのの壺かととててももののみみふふ髮かみとと慈じ姑このの取と手てははででもも
浩こう々々宜よろららうう実じつふふ直ちやく歩ぽのの衫しんへへ面めん構かまへへとと云いふふ
遠とほ人ひとととだだんだんだのの柶き卸おろししふふ出で茂まう作さくままししくく糸いと
僕ぼくいいふふ醜みにく男おとこ子こななららししととくく教しやくええふふ事ことよよせせ障さうりりのの
雜ざ言ごんとと眼めとと約やくりり上あげげをを賣うトト先せん生せいらら笑わらひひををれ

見たり人其如くふ怒つてのあつて商人ふの成ら
れぬ買入が悪口と吐ちて柳ふ清け流し手前見
世の品物も小生顔の痘斑の数より澤山ふ仕入れ
多き面の色の根ふ黒い牛蒡唇の色のやうふ赤い
人参鼻毛の刻と荒和布眼の玉の雁食豆鶏卵色
の三ッ齒まぐ賣物あひ花袖と飾り杏くして生姜
と誹らるるより澤山ふ負申しそ防風どと経
判を積り推茸鬢も島田湯婆もさつて丸塗と
る温飽粉買ふ黄な粉と朝漬より夜をふり一竿

まで見世と張り大安瓜ふりたりはす杯と調子を
合せ客の気ふ逆らえぬやうふせ私を商法人ふい
なつてぬ朝起と香つ張と肩と脊と手と足と
を鉢く熟し昼の稼ぎと夜作と骨を折り無味
いものや食く美味いと少い何を言きても後を立
ぬ振ふなを先々大概るとい出来るだらうが未
ど羨らひ小口の咄し井と啼て出茂作天窓と搔き
高法と云ふものい抄きそねど六ヶ敷とい思ひらん
が武士の修行も職人の修行も商人の修行も同一

八号

八

骨折こぼりで少せう休やすまいまするア先生せんせいあつくり貞まことみく農夫いんぷの
 困苦くんくも亦また寝ねるをー猶なほ委まかしーい話わーが嘘うそとけをむ
 次つぎの巻まきを流ながるさるる宜よろしーの出で茂も作さ手てと拍ちて成なるふ
 ど商法あきあひの秘事ひととやすい茲こゝらの處ところ。エヘン異ちがふ
 詞ことばと残のこすものサ

寄笑新聞第八号終

東京本石町四丁目 岩本 忠 藏
 同京橋彌左工門町 大島屋傳右工門
 横濱弁天通四丁目 中屋 銀次郎

上州高寄田町三丁目 柴田 源 作
 信州上田原町三丁目 田中長右工門
 同長野吉田村 長田 忠 之 助
 武州熊谷本町三丁目 和田 貞 節
 東京照降町 惠比壽屋庄七
 本局 寄 笑 社

九号

第

新聞

寄笑



橋爪

錦造

編集



中之卷



定價三錢五厘

豐

芳家

商厚朴のウラントスの産みて

出藻ふ生ず根げくこの至つて

稀あり枯る後る火の車と造る

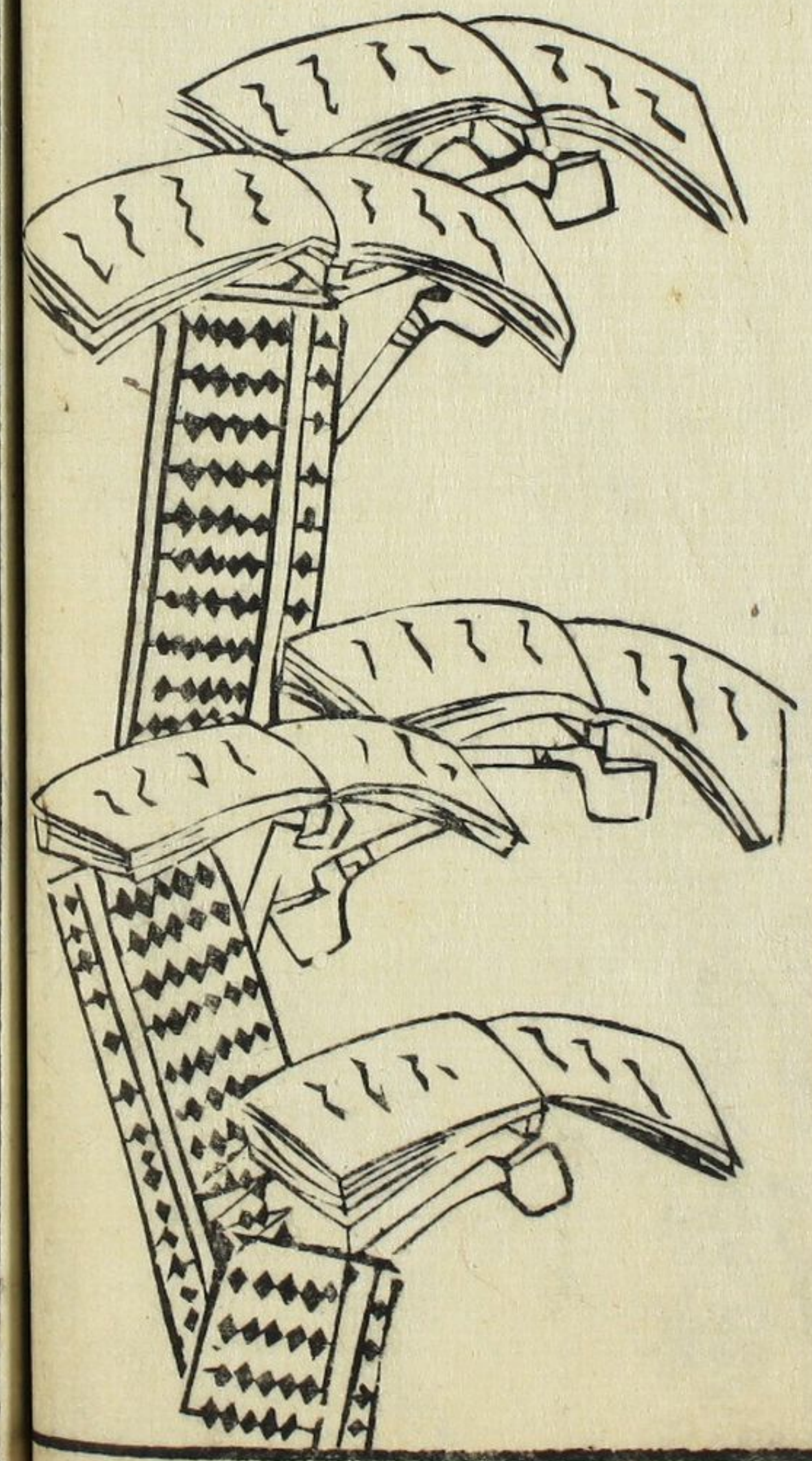
うりつに

近とつて

手と焼と

なれ

商厚朴の木



寄笑新聞第九号 商法論の二

東京

橋爪錦造編集

○

俚俗の云ふ活計の道の嶮きと鬚剃の刃と渡るが
如しと実の妄言をくずす僕偶居当地を過り外國の
商人等が館舎を見る毎に思へらく歐羅巴亞米理
加等のふ々より波濤幾千万里の艱難を凌ぎ羈旅
數有月日の辛苦と厭えず近き親族を遠き遠く
古郷を離れ此地に來るに皆命がけの命がけ大いなる

儲けを為んと計る人々あり彼の樵者亦つ猿稚
子と供ふ連れ鬼ヶ島へ寶財とあり不往との幼稚
をありも一ツる遠へバ食をそ仕弁ふおいらの稚儀を
せざとを寶へ得られずとの事ふそ高法の六ヶ一き
ふ諺へ一あらんつ外ふ人も是ふ類せり 皇ふ人の
眼みそ 皇國人とるも孔子りと疑りし學者釋迦
うと怪しむ沙門福有者ふち大黒辯天好色家ふち
業平小町りと多ふも何れも外ふ人の眼より見
れを始りの皆悉く鬼と思ひしあるべし其鬼が島へ

財寶を得んとて猿稚子の連糸と犬を従へ来り莫
大の入用とかけく見世を開くを 古々の歐羅巴亞
米理加ふも思ひし儲けを故きん是を以て
見もを商法の道の容易うらざらひの世衆一般ふて
獨り皇國のそあゝぬと明け一再説南楚出茂作の
賣ト先生ふ對ひおふ高法の專要とするとも修の
他の家より品を吟味し價と安く賣ふあゝん品美
く價安けもを賣まざる理あるべからずと言ふ賣
ト先生少しく點頭ちを實ふ確論みて高法と笑り

んと為る人の皆以て唱ふるところあり前年僕が
親しくする一滑稽人秋風西より起り白露朝寒
と催すとき或機会とあり俄に大龜三口と築
立て焼芋の見世を開き看板の行燈へ記したる
八里半の筆法と共に勢ひ蝕く賣初めより一が後
十四五日を経るこの人僕が家へ来りて固りて商業
の模様を伺ひしに彼満面勇まを顯はし威風揚
々身を反し肘と張り誇りやうふふ大当りく
繁昌日と追ひく盛んあり然も有るべきり名小

買ふ川越芋の本場と呼らる留村の絶品紅色の
十分あるを仕込め四五日空乾し幹うし大陽に照
させ内部の甘味を浮せしむき楠正成が宇都宮
金綱を悩ましたる蒸焼きの法藁火の下等と用
ひず篠塚伊賀守が推立たる帆柱程の薪を以て
心まぐらうらうら火と徹し赤穂の赤切りと云ふ塩
で味を持せしむ薄茶の口取り四角半の席のか
菓子ふも耻しうぬ紫し然も價は五里五里美
味いと悪口さする十里焼芋などより一倍安く割

九

三

くつぐ朝第五時を期とす。一番金の煙りを
揚げろを相尋ふ。角大師白禿風。天窓皂角虫い
坊主散髪と始ドめとて蝶々鬪お煙草盆の小
生徒徒ら我劣らドと詰りけ先陣後陣の争ひ
みく見世ささの混雑差配人を驚らせり方今の
景勢にてハ倍盛大ふ。芳町或ハ湯島天神の
其往昔の如く哉釜傳へても焼足らざらべ。商法
の幸ハ下等と働くお在り焼芋屋の大統領とな
るも難くらまドおど驚きと弁ト戻りーガ亦二十

日など過ぎ出来りーゆゑ再び商業の摸振を向ひし
彼のその首と垂れ溜息つき満面愁然と青ざめ歎
て言ふ世お焼芋など賣りて引あはざるハガ最を
見世を仕舞ちんと思ふまうり代物を宜くして他所
より安く賣を買人ちますく多けまじも食込る亦
倍多し茲を以て少し儲けと見んと製法と落し代
物と高くまを角大師も蝶々鬪も炭と抱へて我
が見世ささで通り越し他の安賣の家へ駈つけ
忽地一人も来ず成りぬ茲お於て芋壺ハ衛士の焚

〇まらんいみ入れいますうへ
 本い際や通をさんい 運い入いり
 おさんいどんい 袴いをいひい 履いきい 袴いをいひい
 あいがいくいろいろい 早いこいぎいのい 曲い
 ヤいンいヤい ひいやいらいむいんいくい
 といこいろいのい 小い僧いもい
 買いひい使いひいのい 及いきい
 犬いのい けいういけいのい
 ひいやいらいむいんいちいやいくい



九号

九号



九号

く火小異ならず見世と守りて食込むより寧ろ
で居るが増し焼芋の金と家の造作を店賃の滞り
不差配入へ引渡して芋同屋の借りが後腐ま
との成りけりしと蒸きし側み来合せて始終を
居し一人の客膝を進めし言ける振焼芋を賣るふ
芋で儲を見んと為るハ素人なり芋同屋より運
ぶみ自身儲ひく軽子賃と儲けとなし芋も前
後の切屑より宜いところと拾ひ出して葛粉と
し残りハ豚り餅み賣り焚きしハ矢張り藁と用ひ

藁の買出しと藁灰と賣て亦儲けを見軽子賃と
藁灰と芋の前後の切屑ふく家内の暮しを七八
分持せざるを商賣み成らぬ物あり米屋ハ糠俵儲け
酒屋を樽儲けを唱ふ何の商賣みても代物と美く
て安賣と為るみ身と働らせ費へて省くの外あり
と教えたり実み確論と稱すべし君此理み注意
し人となし出茂作ましと問ふ代物と宜くして安
賣を為るを別み腰を卑くし世辞と言ふみ及
ふまどと先生答ふ否く容み對し言葉と和らげ

身と卑うするの愛敬めく商人の第一と為る所なる
 由名常ふ心懸く能く熟まべー急み為んとすこを
 思えぬる遠ひと生ずると何り或士族商法と始め
 其の息子見世ふ居り物を賣るふ客へ對一木で鼻
 と絞ると言ふ譬への如く折つけをき扱ひ多うし
 心を父ある者異見し手前の商賣より餘りり
 愛相あり今の世ふての物を買ふふ壺切らぬ客甚
 稀あり人を見えく少づの掛直を言ふも方便正壺
 までての却つて賣換ふとの古のわざと教えらる

息子の親父の論一伏一客来らる世辞を宜く
 て懸直を言んと待りけし折る郵便の手紙遣
 ひ見世先へ躑と来り此近所ふ伊勢屋さんと
 家のをきやと改れ息子の莞尔と辞宜と
 能いお天氣で少ないな。夫の南へ十軒ほど先
 の家と改き郵便使ひの四足五足往過しと息子手
 と拍ちモシと呼戻し愛敬どろろ一軒おの隣
 りの家おお負申しませうと言ひとちん訓ざる
 更と為るを尋く是らの類ひあり往昔深川根津

谷中^{やちゆう}などみ^ち在^いりー^い拵^{じゆう}女屋^{ぢよや}を^やる^る吉原^{きちげん}へ^ひ引^ひー^ひと^とあり^りく
岡場所^{おかばしよ}と^と唱^なへー^な所^{ところ}の^の拵^{じゆう}女^{ぢよ}急^{きゆう}ふ^ふ里^{さと}言^{こと}辞^をを^をふ^ふと^と
ぬ^ぬりぬ^ぬ其^{その}時^{とき}根^ね津^づより^{より}引^ひたる^た青^{あお}樓^{ろう}の^の拵^{じゆう}女^{ぢよ}馴^なれ^れて^て来^き
る^る客^{きやく}の^の煙^{えん}草^{そう}入^いれ^れの^の綻^はび^びー^びと^と見^みて^てモ^モシ^シエ^エ主^{ぬし}の^の煙^{えん}艸^{そう}入^い
ね^ねを^をお^お切^きれ^れる^るま^まー^まと^と秘^ひ人^{にん}と^と云^いひ^ひたり^りじ^じも^も其^{その}場^ばの^の商^{しやう}法^{ぽう}
み^み添^そぎ^ぎら^らより^{より}の^の一^{いち}笑^{せう}あり^り都^{みやこ}て^て商^{しやう}人^{にん}の^の愛^{あい}敬^{きやう}と^と氣^き轉^{てん}
う^う肝^{かん}心^{しん}僕^{ぼく}往^{わう}昔^{せき}去^きば^ばく^く下^{しも}谷^やを^を通^{つう}行^{こう}ー^{こう}廣^{ひろ}小^{せう}路^ろより^{より}山^{やま}
下^{しも}へ^へ入^いり^り口^{くち}の^の下^{しも}拵^{じゆう}屋^やふ^ふ大^{おほ}高^{かう}鼻^び緒^{じゆ}と^と書^かき^きー^き着^{けん}板^{ばん}を^を
出^いー^い有^あり^りー^りと^と思^おふ^ふ毎^{まい}思^{おも}へ^へら^ら大^{おほ}高^{かう}の^の鼻^び緒^{じゆ}ふ^ふせ^せー

紙^{かみ}の^の名^なま^まを^を握^{にぎ}ら^らま^まー^まと^とい^い言^いふ^ふ物^{もの}々^々大^{おほ}高^{かう}と^と書^かき^きー^き
看^{けん}版^{ばん}ふ^ふ憎^{にく}へ^へ手^てと^と出^いー^い兼^{けん}る^るの^の可^か怪^{かい}な^な訳^{わけ}と^と或^{ある}人^{ひと}ふ^ふ話^わ
せ^せー^せふ^ふ或^{ある}人^{ひと}も^もま^まー^まと^と然^{なる}思^{おも}ふ^ふと^と言^いき^き別^{べつ}ふ^ふ安^{やす}く^く無^なて^ても^も
大^{おほ}安^{やす}賣^うと^とう^う見^み切^き物^{もの}と^とう^うあ^あま^まー^まと^と有^ある^ると^とッ^ッイ^イ足^{あし}を^を止^とる^る
氣^きみ^み成^なる^るの^の総^{そう}て^ての^の人^{ひと}心^{しん}あ^あり^り君^{きみ}商^{しやう}法^{ぽう}を^を開^{ひら}ん^んと^とあ^あま^まー^ま
茲^{こゝ}み^み心^{しん}を^を用^{もち}ひ^ひぬ^ぬ人^{ひと}田^{いな}舎^{しゃ}と^と違^{ちが}ひ^ひ東^{とう}京^{きやう}の^の殊^{こと}々^々同^{どう}一^{いつ}
商^{しやう}賣^うみ^みく^く檐^{えん}を^を並^{なら}べ^べ暖^ぬ簾^{せん}を^を接^まへ^へ見^み世^よを^を張^はり^りた^たま^ま
を^を仕^し込^こめ^め賣^う方^{ぽう}愛^{あい}相^{さう}ふ^ふ少^{すこ}ー^{すこ}油^{あぶら}断^{たん}を^をま^まる^るラ^ラ際^{さい}期^き得^{とく}意^い
と^と持^{もち}む^む常^{じやう}客^{きやく}と^とも^も忍^{しの}地^ぢ他^た家^かへ^へ取^とら^らる^るハ^ハ古^{ふる}き^き見^み世^よ

衰へ新見世の繁昌するみく知りぬべし然と茲
 らふ論ぢるの小僧の商法肝要の事ハ猶次の巻小
 解べしと波き出茂作呆れ顔と上げ。アエ
 前の傳ふぢるのう子賣ト先生ぐつと涙し然を
 高法の味ひハ彼振りふ愛ふと云ふと出茂作歩消
 してラン除り有りささうふもあつて終人

寄笑新聞第九号終

東京本石町四丁目 岩本 忠 藏
 同京橋彌左工門町 大島屋傳右工門
 横濱弁天通四丁目 中屋 銀次郎

上州高寄出町三丁目 柴田 源 作
 信州上田原町三丁目 田中長右工門
 同長野吉田村 長田 忠 之 助
 武州熊谷本町三丁目 和 田 貞 節
 東京照降町 惠比壽屋庄 七
 本局 寄 笑 社

第十号



新笑

聞

搦爪錦造編集



学
ん
の
す
め



山
山
山

寄笑新聞第十號

東京

橋爪錦造編集

電信の張金線（電線）の上下着（上下）の言（い）ひた（た）くあ（あ）くぬ（ぬ）要（要）用（用）
 の口上（こうじょう）綱（な）こ（こ）ら（ら）して（して）千（せん）万（まん）里（り）外（がい）の遠（とほ）き（き）へ首（しゅ）尾（び）よ（よ）く
 話（わ）し（し）残（ざん）仕（し）終（しゅう）せ（せ）蒸（じょう）氣（き）車（しや）船（せん）の鐵（てつ）釜（こま）ふ（ふ）ん（ん）千（せん）七（しち）百（ひゃく）倍（ばい）
 の湯（ゆ）氣（き）と車（しや）力（りき）と（と）荷（に）物（ぶつ）の貫（くわん）目（め）に（に）か（か）り（り）ん（ん）だ
 雲（うん）霞（げ）を推（お）き（き）り（り）飛（と）む（む）す風（ふう）船（せん）の輕（けい）氣（き）球（きゅう）の翼（つばさ）の生（せい）
 と摺（すり）子（こ）木（ぎ）よ（よ）も高（たか）く空（そら）中（ちゆう）に昇（のぼ）り（り）ち（ち）ぐ（ぐ）り（り）地（ち）下（か）み（み）在（あ）



雀（すずめ）か（か）ら（ら）す（す）ふ（ふ）り（り）ふ（ふ）
 「寄笑新聞」の
 チョットと〜と
 チョットと〜と
 ぶんぶん
 か（か）ら（ら）す（す）答（こた）へ（へ）〜
 「〜」も
 カオウ

カホウと
 思（おも）つ（つ）て（て）買（か）ひ（ひ）て（て）見（み）て（て）〜
 まの新聞の作者の
 バカア

アホウ



うてつんまを空ふり天人の小使所出来たうや
疑がつる寫真の繪像八重垣姫の志由一由香ふ薫
ぶり八角時土の劍さを長松の一寸小才より狂
ひを生むるなど食これ文明開化の餘澤あやゆら
ん然まを藝盡し我あそ坐元は金儲けをさする馬
あり風呂しき包と唾へ主人の供またつ犬あるも教
音の徳化をやく動物のみまぐ及びたりあるべし僕が
住居は帝城より北の方の郊外干駄木とまん呼び
たに地みして酒屋へ三里豆腐やへ二里の邊土の僥

倅に隣りの庵の園ひろく春に詠めふ富むりのうら
揚貴妃小町と名ふおひし櫻もりうら色うつろひ
賤の乙女が村雨は蓑一ツどふをきと詠とある籬の
山吹さきみごき躑躅まきりしはあちあちの芝生ふ
残る葦草るんぼの花も莖のびていと長き日を筆
ふ倦と睡氣をさそひ琴此音と耳し彼の「オルゴ
」ルてふをのあまを誰が好事りと耳とすきしん恍
惚として除念あまきどりか怪しいる窓の上るる
の檐端ふ少やうある声しと旅しまる者り胸まが

おどろき所謂ちきぞ天狗の雛子あつめと唾との
息を凝しおつらな怖ろ障子の穴くら逃足で
て覗く見れを豈にらんや人の言辭を為さ
雀とて鳥あり不思議の夏のつらものと
猶耳をせむと眼ふ力を入れつて飛ぶと雀歎
息して言ふ同一小鳥の仲間でも獨り黄鳥の人
間の寵愛をうけ珍重さるゝと分ふ過ぎたり然
れども熱波が冬と形を足る小大小形侘我が
輩とあへて瘦りしとなく只黄なる羽根をほと

ひたつまぐあり思ふに僕らも羽根黄色あつる黄
鳥の如く人間のたぬ又奔走さるべし爰を以て早
く此粟皮色の羽根をせむと黄色ふ為んとを
ども僕らぐ仲間へも不器用にて紺屋の真似を
まろそのなり然るに貴身に渡り鳥みして知見
元より廣く且泥を以て居室を築くの手際も
ねを定めて染物のとれも心得たらん願はく
僕が羽根を黄色ふり給えれと頼まけは
鳥頭と左右へ振り否せまへ甚とさる簡違ひ

あり黄鳥の人うぐいすは稱あや譽まほさるいといね根ねの黄金こがねいろふ
 一うつく美うつくしき故ゆゑにあらずうれ彼か函ゆう谷こより出いでるま喬たか木きに
 移うつる時とき節せつよく鳴なこゑうらるいろろく其その曲まが面白おもしろけ
 きむ春はるの日ひは永ながく麗うるらうるあるみ乗のりト花はなの下したみ
 在ありて茶ちやと煎ひ酒さけをあらむるの友ともと為なるよ足あるを
 以もつあり貴き身みいま栗くり皮かわいろの羽う根ねをかめて黄き
 色いろふ為なるも彼かれが如ごとき声こゑをしてこ嘯さへるといるる
 ほト夫それとも若わか鳴なまるる一音いをかん一音おんをかん一音おんをかん一音おんをかん
 せ給たまへと言いれ雀ハ天あま窓まどをかん一音おんをかん一音おんをかん一音おんをかん
 迎むかへと言いれ雀ハ天あま窓まどをかん一音おんをかん一音おんをかん一音おんをかん

やうふの咽のどの加く減げんあけけきをこ声こゑも曲まがゆまるは
 トけれども美ま似にがあい致すべいとく頻りみ
 一ちうちかけきやうと言いんと為なるもども元もと来きた販ばんに
 あらた声なれをしてちうちかけきやうと言いんと為なるもども元もと来きた販ばんに
 へ出いぬゆゑひ鳥とりをかん一音おんをかん一音おんをかん一音おんをかん一音おんをかん
 夫それ兄あにとま人ひと上うへべと飾かざる羽根ねの色のを偽いつせず
 色いろくあらうるも黄うぐいす鳥とりの業あらうるも黄鳥とりの業あらうる
 奔か走はしるすべき上うへ粧まひの立た派はるるハ恥をかん一音おんをかん一音おんをかん一音おんをかん一音おんをかん
 一ちうちかけきやうと言いんと為なるもども元もと来きた販ばんに
 一ちうちかけきやうと言いんと為なるもども元もと来きた販ばんに



〇象の鼻で
 饅頭を
 巻き
 生酔の
 鼻唄で
 巻く

「鼻は下延して
 かみ巻ろるる牛の角ゆきの
 のろの宿い

梅澤源夫

十一号



只
 耳黄通

十一号

四

亞細亞州の西の方ある亞西里亞國の女王は志
美連美寸と言ふ者あり國富と兵盛んみ威
を近隣に振ひ一かを勢ひみ乗ト印度國をも
併吞するさんと自身數万の兵をひきひ既み其地へ
うち入りたり印度王あれを軍き尋常みては志美
連美寸が猛るるに當りかごとく大い軍を起せ
しう人豫て軍陣へ用ゆる為ふ馴しおきくる數百
匹の大象を先鋒とあり進めたり斯く亞西里亞勢
と印度勢と戦争すとまり戦ひや闌なるとき彼

數百頭の大象くるひ出で亞西里亞勢を鼻ふて
巻きあげ足あぐ踏ちらしけま志美連美寸が
兵の強勢小敵一がごとく散々み成りて敗北なり
たり然も志美連美寸は必ひゆるざる象の為み
不覺と取り一故如何もして此象をうち平げ
んと昼夜謀慮を費やせと能計策もはらざる然
ばとく此ま戦つるまを象の為み軍を破ら
まんともひるやと急み驚色の牛三千匹を殺し其
皮を剥ぎとり象の形体み縫ひあはせ駱駝の身体み

被せけしを宛然^{さまざら}考^と色の大象^{おんぞう}の如^{ごと}一爰^{ここ}不^あ於^か志^し
美連^{みれん}美寸^{みすん}の偽^{いつはり}せしもの象^{ぞう}を従^{したが}ぐ^り再度^{ふたたび}軍^{ぐん}
を向^むけたる^り印度^{いんどう}王^{おう}もま^ま撃^{うち}出^いぶ^い亞西里亞^{あしりあ}の
陣中^{じんちゆう}に數^{すい}百頭^{ひゃくとう}の大象^{おんぞう}ある^りを^を見^みて大^{おほ}い^いみ驚^{おどろ}き^き吾^{われ}が
國^{くに}の外象^{ぐわいぞう}を^を用^{もち}ゆる^りと^と有^ある^りま^まど^どと思^{おも}ひ^ひ一^{ひと}み^み是^こを
駱^{らく}ど^ど一^{ひと}き^き大象^{おんぞう}うる^りと^と呆^あれ^れと^と忙^ま然^{ぜん}と^とし^しう^うち^ちを^を合^あ
戦^{せん}と^とし^しり^り兩^{りゆう}軍^{ぐん}鋒^{ほう}を^をま^まど^ど由^ゆる^りみ^み至^{いた}り^り例^{れい}の^の如^{ごと}く^く印度^{いんどう}
の象^{ぞう}の志^し美連^{みれん}美寸^{みすん}が^が備^{そな}へ^へ走^はせ^せ入^いり^り亞志里亞^{あしりあ}勢^{せい}を^を
を^を蒐^あら^られ^れど^ど詭^{くわい}蛇^だへ^へ着^まき^きの^のを^を被^ませ^せら^らる^る象^{ぞう}の^の何^{なん}の^の役^{やく}

をも^も為^なさ^さる^るの^のと^と却^かつ^つて^て味^{あじ}方^{かた}の^の者^{もの}の^の働^{はたら}く^く妨^さげ^げと^とな^な
り^り一^{ひと}つ^つを^を亦^{また}さ^さん^んぐ^ぐみ^み歩^あ負^おされ^れ志^し美連^{みれん}美寸^{みすん}女^{にょ}王^{おう}
の^の辛^{くる}く^く亞西里亞^{あしりあ}へ^へ逃^にか^かへ^へま^まり^り実^{まこと}み^みよ^よの^の如^{ごと}く^く駱^{らく}蛇^だ
へ^へ象^{ぞう}の^の皮^{かわ}を^を着^まき^きせ^せた^たり^りと^とも^も争^いう^う象^{ぞう}の^の役^{やく}を^を為^なん^んや^や
貴^き身^みも^も又^{また}是^これ^れと^と同^{おな}じ^じ一^{ひと}羽^う根^ねの^のと^とを^を黄^き色^{いろ}く^く一^{ひと}て^て黄^き色^{いろ}
の^の粧^{よそお}ひ^ひみ^み偽^{いつはり}る^ると^とも^も黄^き色^{いろ}の^の美^び音^{おん}と^と曲^{まが}の^のよ^よま^まや^やう^うある^る
粘^ねり^りを^を為^なす^すが^がさ^さら^らる^るべ^べ一^{ひと}板^{いた}令^{しやう}柿^し漆^{しやく}の^の衣^き服^{ふく}を^を為^なると^と
も^も声^{こゑ}黄^き鳥^{とり}の^の如^{ごと}く^くあ^あら^らる^る鳥^{とり}好^{この}の^の人^{ひと}豈^{いか}棄^すあ^あら^らん^んや^や
若^も一^{ひと}黄^き鳥^{とり}の^の全^{ぜん}盛^{せい}を^をう^うら^らる^る思^{おも}ひ^ひが^が声^{こゑ}の^の麗^{うる}ら^らし

きと曲の細やうるると学び上粧ひみ習ひたぬふな
と論しけきむ雀頓首して己多を拝し実み上皮
のそ黄鳥み似たりとして夫どけの業みけれを却つ
耻を求る種あり今すでみ黄鳥の如く轉きよと言
まし時鳴んとまきども自己の持主人の声より外
へ出ざる故実みりり赤面ありたり黄鳥の色の
羽根又ありとん止み為んと言ふ時し由花手折る
音まらるゝ敬馬ろきてや雀乙鳥の羽むさきうら
此方へ飛びさうらり茲みおいそ夢の覚る心地し

つ以為善うる己多の言ふとや熟今の世の童子と
るるみ洋學を為んとまきむ先踏をまき衫巻きと
踊うとおどらんと為むを頓み眉毛を細くし帯を尻
あけにメるの羽根を黄色み漆んとする少雀み整し有
若よく孔子に似たりも其徳をけきむ師とまらみ
足らば実教を棄て上飾りと専らとあり彼の衣
服が慾しいの此帯を買たののと母親の脈をぬき
父親の臍をかぢらんとする村の子供ら来れより
此更を以て諭し呉んとするらん又庭口より

手折り一花を携えて嘈々入り来る童子らを見
 るより此方の声うけて「雀とひるの今の話」残
 たり子供ら一同「嘘とく」嘘とく「食が雀の箱
 人の教えを納のぞ子供一同手をうちて「ラット
 合点ど」あたまのサ「コレねのサひるの教えが「善
 いとサと雀踊りの振りを以て答へを為す」ついで
 雅たり

寄笑新聞第十号 終

東京本石町四丁目 岩本 忠 藏

回京橋彌左工門町 大島屋傳右工門

横濱弁天通四丁目 中屋 銀次郎

上州高寄田町三丁目 柴田 源 作

信州上田原町三丁目 田中長右工門

同長野吉田村 長田忠之助

武州熊谷本町三丁目 和田 貞 節

東京熊降町 恵比壽屋庄七

本局 寄 笑 社

寄笑新聞
第十
一號

橋爪錦造編集

士商論

無常坊



道正

○此扇を以て

招けを救盛きやうの

さそあき賢愚老少を

ざらひや

嘘とちがさむ一寸招て

兄や人寄笑新聞の編者

まぶの第一むんふある蓋一怒と

読むおろぐず心の欲する

ととろとほらんあきかー



寄笑新聞第十聯

東京

橋爪錦造編集

爰こゝふ一人ひとりの士族しぞくあり名なを井い迺の射あ人んどといふ御ご維い新しんい
 らい勤つとめをけせど少すくく黄金こうごんと貯たくわへたを奉ほう還くわんも
 せず内職うちわざもせず日ひ々々み流行りゆうぎやうおくれの書まを讀よむ時ときとし
 て後園こうえんに出いで此こゝの畑はたけを穿あらうなと一ひと稍やも乃すま
 を江湖やうこ上うで論ろんじて額ひたふ青筋あせを燃もす癖くせある性さが質が
 りりしが徒然つれづれあり終まふ一日いちにちまゝと方まう今こんの形かたち状じやう商家けあの

盛大なる茂えて氣と揉出—斯の如くおての諸商人
ら勢ひと得士族の權日ニ隨グひ微々多らんなど歎
息して以爲夫あきまひを爲るその他物と賣り
品ふ應して利潤をばさめ其日の活討とまを以
て商人仲間ハ大小貧富ハ関係らず賣方と成るを
身と下ろ—詞と和らげ買方の押柄と請流す
倍ふちの家業ふ負るまう然れども代つて買方と
成るときは賣人ふ對—押柄と極々尊大なるを
前の買方の如くまを差引勘定として相互ひる

り飯令バ天秤棒を肩ふ掛け高買するもの呼び込るま
を荷を下—其家の見世の片隅へ至り—今日を茄子
のちりり蠶豆の一粒より胡瓜ふ根芋さや豌豆の上
ものときき奥の方か—臺所伴頭が出うけて来
荷茨の中を覗きあそ—何と相替らず青物市のを
き奇せと拾つて来るとなりんえ移人代物どぜ。へん
蠶豆の一粒よりと云やア体が宜けまど悪りの奴半
りの一粒撰だらう開いて根芋の惣身のうち七分
を芋売ふ化て居るぢやア移人うーヤ此胡瓜のうー手

摺ねたるア疣うぶく平ひららふ成なて居ゐらア川せう柳りゅう点てんみ一ひと青あせ鬼おにの屋や
寐ね烟えん瓜かをあついと出でしと穿うちがあつとせめく
青あせ鬼おにの胡こ瓜かなどの物ものあつ我わ慢まんをささるが黄わう疽じゆん病びやうの
胡こ瓜かのやうに黄きり色しきと来まちヤア恐おそるぜお店みせをぞちヤア
正月しょうげつごろで無なアア茄子なすをとりと稱なづへ移うつ入こるど買か
もせぬ先ま々ま悪わる口くち言いれてもつと追お従しやうし居ゐるハ
百ひゃく屋やさんさんが買か方かたふ変かると何なんれ大おほ店とんへ往まても見み世せ
のま中なかへ突つかけて立たちどろろ「オお半はん紙しと一ひと帖てうくん移うつ入こ
お前まへの所ところの紙し直なぐ高たかへ替かりよ濼すぎまが澤とん山と有あるか

ら七しち夕しやうさぬ人ひと上あると手て放はないで網あみの代しろりあらア开あく
此この間ま買かと浅あ草くさ紙しハ毛けどらけ自みづか己ぢア家うちへ帰かへつて見みて
豕しの皮かわハと思おもつぜ商しやう賣ばいめりりどア些ちと代しろ物ものを吟ぎん味み志し
移うつ入こる移うつ言いへど賣う方かたを「あつ」と脹はももせずみ會あ釋らうる
万まん歳ざいと才さい藏ざうの一日いちにちがより押お柄へと極きまたり極きまらむたり為な
るの客きやくと成なり主しゆと成なると以もてあまど士し族ぞくを客きやくと成なる
むりりて賣う方かたふハ成ならぬ故ゆゑ彼かみ儲たくわけを得えさせ恩おんを着き
すのハ常じやう子しとどいさうも我われみ恩おんと着きるとあつ茲こゝみ於おて
取とりこけ尊そん敬けいせねを成ならぬ理りありと近ちか頃ころ商あき人ひとども金きん

十一

十一

権あるみ任せ同等の論まどと起し我輩と輕蔑する甚
どし善く以来の物かひみ往くどみ彼らと一く鍛へけ
教諭あり異んと誥らぬ所へ奮發しやも為ると人の
見世先へあし上り此理を以て談づけを商人らの大いみ
五月蠅くおこしひ一者新聞み出でて一同言ひ合せ射人
あり物と賣ぬとみ極めたり射人は是と安き火の玉の如
くみ成りて怒り忽地一文と作り商人の非を論じ續
いそ新聞みあらしひし士族一同の商人より物を買ぬや
らみと頼もたきと飯も給ずあり居られず犢鼻褌も穴

があつてのメラもぬゆ此相談み乗るものせけれを射
人の報告書畫餅とあり其身一家の難義と引出し
たきと頑固の親父も屈せず畑の芋東埔塞手作
りの味噌澤菴の香の物梅干の圃いかく糠味噌の
古漬まぐ拾ひ出し果の庭のうちの木の茅草の根
食はくせり油塩煙草砂糖松魚節の捨鐘のうちみ
無あり手拭犢鼻褌衣服まぐ式ひら破れ式ひら
汚きし宛然新田義顯が金崎の籠城ろ加藤清
正が蔚山み明の大軍を引請くあり異ありを然もが

士を還^まりて
 なると^よ讀む
 干^りと^り字ぞ
 ゆげん
 めさるる
 梅亭
 源夫



一五
難人一家を鬼界ヶ島へ取り残さしめた俊寛僧都が手馴
の杖あらずの伯夷叔齊が首陽山に揃せて一蕨の干あ
がりし如く不瘦おとろへ今をさや餓死すのむりりぬりたる
所へ駿川の地より親族の者尋ね来り人々が干鮑の如
くたる体とえて大い不驚まぢの仔細を問ふと鮑人を
霜ふるやめる馬追虫より弱り絶々あり声して有し侘
と話し僕今までの商人を昇しめ士族と尊く思ひ又
黄金不代る寶ありと極めたりし今日と成りてを
買入より賣人が尊く一田の紙幣ハ一まんの塩煎餅

一六
ふ如ざるを發明と云ひ来一人を真面眼
に賣人の買入より利を取って生養ひと立ち買人を賣
人より物を得てまゝと生養を立つ買人と賣人の如
く巴の如く更ふ甲乙なるべし然るを君も賣と買
ふとを知らず買てをむとのを思ふ故かぐる難を引
出せり又黄金不代る寶あり其故も一田の物を
一田に買んと為るふ因り商人の為ふ物を賣とぎ
ども一田の物と二田に買んと言ひ君の押柄と悪と君
ふ物を賣トと盟約するとも其言ひ合せを破り竊る

不賣んと我預ふもの何れども有るべし黄金ありを何
ぞ彼らふ苦しめらるは蚊蜻蛉の如き安しきなり眼むり
り光らして居るふ及むんと嘆き射人大いふ喜び急
ぎ此人やたのミ米屋酒屋とあり有用の商人へ倍
の價へと遣へし買ひ請んと言ひ送りけれを何れも
豫くの條約を壁へし他先を越さぬうち不賣り
込んとせよとぞ了得ふ四辺と憚りもむ始とめの程い
朝まとき便ふ給れまどしてその品とを運びし他の
商人ら射人が高直ふ買ふ支と嘆きつけ糶賣り不

来りも互りて果は白昼とりんども桶をかどげ旅を荷ひ皆
争をひて賣んとを求めける故此議論のんべんくらりの
和睦とあり射人一族の差つうえなく食ひ込る虚満の
出で不ど肥太る頃々何根やら彼振やう賣人より直
段を糶り下げ世間の相場ふて諸品を買まらるやう
ふ成りたり爰ふ於てまこと以謂是まごの士族とらんども
士族を以て威張りし有らば士族の身体不備ふべき
徳らるが故に其徳の威張りしあり武士へ食ずと高楊子
とい眼を凹ませしとなき不阿化の行止り地獄の沙汰

も金次第きんさいだいが古今ここんの穿あり獨立どくりつ不羈ふきの通言つうげんと稱いまべー
敵てきも味方あじ焰えん方面へんも地蔵ぢざう顔げんとまるの黄金こがねの光ひかりりる
光ひかりり放はなつて奮あげ御託ごたつと呼よぶ人ひと悪あくくて服うせぜ此こゝ
光ひかりりと光ひかりらせて押柄おしづを巻まあげと人ひとその押柄おしづを耳みみ
ざると憂うれふ我われ一錢いちせんを一錢いちせんひなぐく舊癖きうき乃なり
士風しふうを守まもり十錢じゅうせん二十錢にじゅうせんの御託ごたつとまき一いちより彼らかれらの
申まをし合あせと食くらひ食くらふべき物ものと食くらひせらとざるとふ
驚おどき漸や開ひら化くわふ遠とほきと知しりあり然しかれども商人わきうどをら
僕わがと兵糧へいりやう責せふ乃なりさんとの盟約めいやくとまゐるぐく一倍いちばいの價あ
を

を出だせを忽たちまち地裏ぢらぎり抜ぬ蕘ぢて今いままで敵てきと為なしたる
者ものへ竊ひそりふ諸品しよひんを運たび来きるの慾よくふ眼めのをさ人情にんじやうふ
て慾よくを以もて導どうけを私こゝろの盟約めいやくをふき公こうの法律ほふりつさへも
破やぶり懲役ちやうえきの奴やつさんと成なり罰金ばつぎんのお灸きうと居ゐらるは
いふ世話せわと蒙かういる者ものも間まあるを歎なげ息いきするふ餘あまりあり
僕わがが頑固がんこの舊癖きうきを直ただすも易やすく治なるも易やすけきと慾よく
ふ暗くらがる眼まなこの療治りやうぢの往昔いふしへよりの難症なんじやうふく當今たうこん益えき
流行りやうし北斗ほくと香かうや光明くわうめい膏かうでい愈いすも難なんく愈いるも
難なんし嗚呼あまの慾よくふ暗くらむ眼めのわらぢい我われふ於おて如何いか

